
ふわふわ日記

睦月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふわふわ日記

【Nコード】

N4438M

【作者名】

睦月詩音

【あらすじ】

天然で優しくて少々オトメンな男子学生：長瀬翔と普通(?)の女子大生：二宮明奈の恋模様を描いた短編集です。こういう男性がいたらいいなという完全に自己満足の世界となっております。基本的にほのぼの系でオチがありません。そして、大した内容の濃い話でもないですがお許してください。

補足：vol.1~5は序章のようなもので、メインはvol.6からになります。

Vol. 1 出会い（前書き）

長瀬翔と二宮明奈が初めて出会った日のお話です。

二宮明奈は次の授業場所である実験室の扉を開けた。

大学に入学して1週間、農学部で理科が好きな明奈は新入生用の科学実験の講義を取ったのだ。

2限と3限の時間を使って行われるが、単位数は1限分しか取れないので人数が10名ほどの人気のない講義だ。

明奈は実験室に入り、手前の実験台の横のイスに座った。

「それでは、授業を始めます。」

2限の開始時間になり、教授がそう言うと同時に一人の男子学生が教室に入ってきた。

「すみません、ここ良いですか？」

「あつ、はい。」

明奈の隣の席が空いているのを真っ先に発見したその男子生徒は、急いでその場所に腰を下ろした。

明奈のその男子生徒に対する第一印象は、怪しい…だった。

というのも、その男子生徒は普通のマスクより一回り大きなマスクをしていたからだ。

(風邪か…でも、マスクの大きさもう一回り小さくても良いよな)
そう思い、明奈はその男子生徒の顔をまじまじと見る。

黒に近い茶色の髪に白い肌…それよりも、マスクをしているためか無意識に目をよく見てしまう。

大きくて優しそうな目、そして、きれいな瞳だと思った。

明奈の心から怪しいという感情は消えていた。

「じゃあ、そこそこそこでグループになって…」

教授が近くにいる人を適当に集めて実験のためのグループを作り始める。

明奈は、その男子生徒と他の男女それぞれ1名ずつとグループになった。

そして、実験の説明が終わると、早速各自で行動するように言われ、自己紹介から始めることにした。

「僕の名前は長瀬翔です。よろしくお願いします。」

「私は二宮明奈です。こちらこそお願いします。」

男子生徒の名前は長瀬翔。翔は、男子特有の低い声ではなく、中性的で透き通るような声をしていた。

(目も声も優しそう…)

明奈はそう感じ、一瞬、自分が男性不信であることを忘れた。

実験は、もう一人の男子生徒がリーダーシップを取り、順調に進んだ。

薬品が反応するたびに明奈は「わあ〜」とか「おお〜」と楽しそうな声を出す。

翔はそんな明奈を微笑ましく見つめていた。

途中昼休みを挟み、3限の時間の中ごろに実験が終わる。ここからは実験のまとめを作成する時間だ。

明奈はサクサクとプリントを埋めていく。

一方の翔は、小声で「あれ？あれ？」と独り言のように呟いていた。

「どうかしたんですか？」

明奈は困っている様子の翔を見てすぐに声をかけた。

「ああ、計算が合わなくて…」

「それなら、ここはこうで…」

明奈は分かりやすく翔の計算を修正した。

「ありがとうございます、二宮さん」

お礼を言う翔の声はやはり優しかった。

授業が終わると、明奈はずっと気になっていたことを翔に聞いた。

「あの、長瀬君…なんでそんな大きなマスクしてるの？」

「風邪ひいてるから…」

「いや、あの大きさが…」

「ああ、小学生の弟が風邪うつつたら絶対ヤダから、大きいマスクにしろって聞かなくて…。最初は大きさをなんて関係ないって思ったんだけど、何回も言われてるうちに、大きい方が効果があるような気がしてきて…。実際どうなのかな？」

「うーん、どうなんだろ…」

（いや、普通の大きさが十分でしょ…とは言わないでおこう）

ワクワクする実験、そして、翔への興味…明奈はこの授業が毎週楽しみになった。

（二宮さん、実験してるときめっちゃ楽しそうだった。おかげでこちまで楽しい気分になったな…）

…そして、この時、翔も明奈のことが気になっていた。

これが2人が初めて出会った日。

vo1・1 出会い（後書き）

はじめまして、睦月詩音です。

駄文で完全に自己満足の世界でやっておりますが、よろしくお願ひします。

1話だけでも読んでくださった方、ありがとうございます。

vo1・2 どんな人？（前書き）

明奈と翔のだいたいの特徴が分かります。今回は、あまりお話という感じではないです。本当はここら辺の過程をもっと濃密に描くべきなのかもしれませんが、メインは彼らが恋人同士になってからにしたいので、割愛しています。

vol.2 どんな人？

実験の授業を通して、明奈は翔のことを少しずつ知っていった。

翔は工学部の1年生。実家から大学へ通っている。

男の子だけの3人兄弟の二男で、兄は同じ大学の4年生、弟は小学校3年生。家族みんな仲良しらしく、家族でお出かけした時のエピソードや兄弟で遊んだ時のエピソードをよく聞かせてくれた。

実験後のまとめで、計算は毎回のようには間違える。他にもどこか抜けているところがあり、おそらく天然だと思われる。

好きな映画はジブリ作品。

スイーツやかわいいものが好き。

そして、明奈との大きな共通点は、ポケモンが大好きなこと。

…授業で会ったびにおしゃべりし、翔のことを知れば知るほど、素敵な人だと感じる。…もっと翔のことを知りたい。気がつけば明奈は翔に恋をしていた。

一方の翔も授業を通して、明奈のことをどんどん知っていくのが嬉しかった。

明奈は農学部の一年生。現在は親元を離れて一人暮らしをしている。父親の話になると表情を曇らせて多くを語ろうとしない。母親と2つ年下の弟とは仲が良いらしい。

翔がスイーツやかわいいものが好きだと知っても、変な顔をしなかった。それどころか「私も好き！」と言って喜び、ますます話が深まった。

いつもセミロングの髪の毛を流していて、服はチェックのものが多い。

そして、翔との大きな共通点は、ポケモンが大好きなこと。

∴ 明奈となら自然体のままの自分で楽しい日々を過ごせる気がする。気がつけば翔は明奈に恋をしていた。

翔に恋をした明奈ですが、実は彼女には暗い過去がありました。Vol. 3で、告白を思いとどまろうとする原因が描かれています。

私の本来書きたい作風とは、ずれてしまっているので番外編とさせていただきます。

中学2年生の秋：

明奈には付き合っている彼氏がいた。

学校祭で、同じ大道具係を務めたのをきっかけに話すようになり、学校祭終了後に彼に告白された。

大道具係のリーダーとして、若干強引に皆を引っ張る部分もあったが、力仕事を手伝ってくれるなど、優しい印象だったので明奈も付き合うことを承諾したのだ。

男らしいと評判の彼は、女子にも人気で、明奈を羨ましがる者もいた。

…きっと付き合っていくうちに好きになるだろう。

だが、付き合ってからすぐに、彼は自分には合わないと感じた。

*

「なあ、お前ってさ…」

「その、『お前』って言うのやめてくれる？ 私苦手なんだ…」

「はあ、女って『お前』って呼ばれたら普通喜ぶもんじゃないの？」

*

「俺、カバン持ってやるよ。」

「大丈夫。私、持てるから。」

「はあ、俺が持ってやるって言ってるんだから、大人しく持たせる。かわいくねえやつ。」

*

「明奈、プリント俺の分も持ってこいよ」

「なにそれ！？そんな言い方するんだったら、自分で持ってきて！」

「チツ、面倒くせえ。」

*

支配欲の強い彼は、明奈には合わなかった。付き合いっていくうちに好きになるといふのは、もはや、あり得なかった。

そのため、放課後の教室で彼とその友達が

『「なあ、明奈とはまだなのか？」

「ああ、ただだけど、近いうちに上手いこと言って家に呼んでみるよ。アイツ、ガード堅そうだけど、家に入れちゃえばこっちのもんだろ。」』

という会話をしていたのを偶然聞いた日、明奈は彼にきっぱりと別

れを告げた。

明奈はあんな彼と付き合ってしまった自分が憎く悔しかった。

その日、明奈は自分の部屋で涙を流していた。

すると、玄関のドアが開く音がする。父親が帰ってきたようだ。

普段、父親は家族に説教することはない…が、褒めることもない。明奈がどんな進路を選んでも文句は言わない…が、応援もしてくれない。…要するに、家族に無関心なのだ。

小さいころからそうだったので、明奈は、父親に干渉されなくてラッキーと気楽に考えていた。

それに、母親と弟とは、非常に仲が良いのでそれで良かった。

しかし、時々、ストレスがたまると家族を下僕のように扱ったり、自分にとって都合の悪いことは何でも家族のせいにしたりするので、それは耐えられなかった。反論すれば、ここは俺の家だ、気に入らないなら出てけと威張り散らす…

…今日はその“時々”の日だったらしく、すぐに低い怒鳴り声が聞こえてきた。

「おい、今日使う会議資料がなかったんだ。お前がなくなしたんだろ
う！」

母親を責めているらしい。…いつも、そうだ。自分の非はすべて母親に押しつける。

だが、母親は父親の部屋に入ることを許されておらず、部屋には鍵がかかっている。仕事に使うものをなくすなどあり得ない。

矛盾があっても何でもとにかく人のせい…。

彼とのことで心が傷ついていた明奈は、運悪く父親の悪癖に遭遇してしまい、ますます涙が止まらなくなってしまった。

（男なんて最低…どうして父親の性格悪いの見てわかってて彼氏なんて作っちゃったんだろう、バカみたい…）

（私は一生恋愛も結婚もしない…）

明奈は友達と母親と弟がいて、趣味の時間さえあればそれで幸せだった。

あの日以来、カップルを羨ましがること、「彼氏ほしい」「結婚したい」の言葉に共感することもなかったし、男性に不信感を抱くことはあっても恋愛感情を抱くことは決してなかった。

長瀬翔に出会うまでは…

VOI・4 翔の過去 番外編（前書き）

明奈に思いを寄せる翔ですが、彼にも実は暗い過去がありました。
VOI・5で、告白を思いとどまるうとする原因が描かれています。

こちらにも番外編とさせていただきます。

高校2年生の春：

「好きです！僕と付き合ってください！」

「ごめん。翔君のことは良い友達だと思ってる…。だけど、恋愛対象にはならないって言うか…。翔君って優しいんだけどさ…。やっぱり付き合うなら強くて男らしい人が良いんだよね。」

翔は振られてしまった。

しかも過去にも同じ理由で2回振られている。

翔に似て穏やかな性格である父親と、ポジティブで明るい母親は、いつでも翔の個性を尊重してくれた。だから翔は、その穏やかさゆえに一部の心ないクラスメイトにからかわれても、自分を嫌いだと思っただことは一度もなかった。

だが、3回も振られるとさすがに自信をなくす…。自分には何か足りないのだろうか…。

* * *

「僕はどうしたらいいんだろう…。」

放課後、翔は親友の翼に告白に失敗した件を話した。

「そう気にするなよ。俺は翔みたいな男だって絶対必要だと思っぞ。」

「でも、3人連続で振られてるんだよ。」

「たったの3人だろ。それに、親しみやすいからって翔に話しかける女子は割といるけど、俺なんてこの見た目だけで女子から敬遠されるんだぞ。もしかして、その中に翔のことが好きって人いるかもしれないだろ。」

「そうかな…ってというか、いっつも思うんだけど、その格好やめる気ないの？」

翼の見た目は、一言で言うとチャライ。明るめの茶髪で、常にピアスとネックレスをしている。

「ん？やめるなんて考えたことないな。まあ、やめない理由もないけどな。でもさ、これが俺ってというか…俺がこの格好やめたら何か変な感じしないか？」

「ああ確かに…」

「何か翔にもないか？そういう感じのこと…」

「あゝ何かわかるかも！」

翔は人から穏やかだとか物腰が柔らかいだとか言われることが多い。周りの男子と比べると、確かに自分でもそういう人間だと思う。だからと言って、周りの男子と同じになろうとは思わないし、ならな

ければならないとも思わない。いや、なれない。強くて…とか男らしくて…とか今ひとつピンと来ないのだ。

「よし！翔、今から傷心カラオケにでも行こうぜ！他の奴も誘ってさ。いつか絶対、翔じゃなきゃダメだっていう女の子が現れるって俺は信じてる！」

「ありがとう。本当にそうなるの良いな。…さて、カラオケで何歌おう？」

そして、2年後、本当にそんな女の子が現れるのだ…。二宮明奈という女の子が…

vol.4 翔の過去 番外編(後書き)

本来のこの章の出来が、あまりにもひどすぎたのでお話をほぼり二ユーアルしました。少しはマシになったかな…。

8月の始め…

翔と明奈の関係は相変わらず普通におしゃべりする友人のままだった。

気がつけば、翔と会える実験の授業は、あと1回で終わりだ。

その前日、明奈は学食でケーキを食べながら、友達の沙枝と話していた。

沙枝は中学校で出会った友達であり、高校は別れてしまったが、メールで連絡を取り合い、大学が同じだったため再会した。

中学校の頃、元彼や父親のことで、よく相談に乗ってもらっていた。

そして、今回は翔のことで相談に乗ってもらっていたのだが…

「…やっぱり、告白はしなくていいよ。」

「明奈、本当にそれでいいの？ 私、長瀬君は大丈夫だと思うよ。」

「だけど、やっぱり男の人、怖いもん。友達として付き合ってるうちは優しくても恋人になったら…中学の時のアイツみたいに…あの時はすぐ別れたから良かったけど、そのまま付き合ってた、万が一大人になって結婚なんてしたらお父さんみたいになるんだから…男の人ってそんなもんだよ…」

「長瀬君のことも怖い？ 長瀬君もそうなるって本気で思ってるの？」

「長瀬君のことは全然怖くない。初めて会った時から不思議なくらい怖くなかった。それに長瀬君はアイツや父親みたいにならないと思う……」

「だったら……」

「でも、長瀬君が私のことどう思ってるかなんてわからないし！ アドレス交換してるんだから別にいいよ。あっ、そうだ。別に向こうからメールが来たこともないし……」

明るい口調でいう明奈。

「ホントにそれで後悔しないの……？」

沙枝が悲しそうな顔で明奈を見つめる。

「……！！」

(このまま長瀬君と何もなく終わっても、沙枝や他の友達との楽しい日々がずっと続く……だから、何も悪いことなんてない……もともと恋愛する気なかったし……でも、何でだろう……何かすごく後悔する気がする……)

「ねえ、明奈。何かあったら私が絶対助けるから。せっかく、男の子が嫌いで、恋愛も結婚もする気なくて、それなのに好きって思える人に出会えたんだよ……」

「…」

少しの間考え込み、明奈は小さく深呼吸する。

そして、明るい声で言った。

「よし！私、頑張ってみるね！！ 沙枝、ありがとう。」

「うん！明奈頑張れ！！ … 明奈、もう1個ケーキ食べちゃおう！」

明奈と紗枝は、席を立ち、本日3個目のケーキを買いに行った。

その日、別の学食には翔と翼がいた。翼は翔の高校生の頃からの友達である。

「なあ、翔。明日で実験終わりなんだろ。二宮さんとこのまま会えなくなってもいいのか。」

「そうなんだよ…。だから告白したいと思ってる。」

「よし！そうしろって！俺、話聞いてたら、二宮さんと翔はお似合いだと思っぞ。」

「でも、また高校の時みたいなこと言われて終わりなんじゃないかって思っぞ…」

「そんなの告白してみないと分からないだろ。」

「そうだけど…」

「二宮さん、どんな人がタイプとか言っていなかったのか?」

「恋愛の話なんてしないよ…でも、たぶん性格の悪い人は嫌いだと思う。」

(そんなの誰だって嫌いだろ…)

「翔…告白しないで、後悔しないか?」

「…」

翔はじっと考え込んだ後、突然立ち上がった。

「する!ここで告白しなかったら、絶対後悔する!告白してみる!」

「おう!ダメだったら、次の日は、他の人も誘って、一日中傷心カラオケでもしようぜ!」

「ありがとう! …あれ、何で立ち上がったんだろう?」

(二宮さんのタイプが天然ボケでありますように…)

その翌日

最後の授業でも翔は相変わらず、実験のまとめに苦戦していた。

「長瀬君、また計算合わないんですよ。」

明奈がおかしそうに言う。

「う、うん……。また、教えてもらってもいい？……最後までごめんね。」

明奈はいつものように翔に計算を教える。そして、無事にまとめが終了し、プリントを提出した。

普段だったら、すぐに教室を出る準備を始めるのだが、この日は2人とも黙って座りこんだ。

目的は一つ……。

先に口を開いたのは明奈だった。

「これで授業終わりだね……。長瀬君……えーっと……。」

好きです！……と言いたいのだが、なかなか勇気が出ない。心臓だけがドキドキと高鳴る……。

すると、次に翔が口を開いた。

「二宮さん、いつもまとめ手伝ってくれてありがとうー！それと……」

…」

勢いよく言ったものの、やっぱり好きです！とは言えなかった…。

(ヤバい…緊張する…でも、せっかく「ありがとう」「って言えたんだ…この勢いで…)

「私、長瀬君の…『好きです!』」

「えっ!?!」

「僕、二宮さんのことが好きです!」

明奈が告白を始めたのとほぼ同時に翔が思いを伝えた。

「あっ…私も長瀬君のこと好きです…」

驚いた明奈は放心状態になりながら思いを伝えた。

2人とも大きく深呼吸をする。そして、静かに見つめあった。

「ありがとう…二宮さん…」

「長瀬君こそ…」

「…僕たち恋人同士で良いんだよね?」

「もちろん」

「じゃあ、早速学食のケーキ食べに行かない? 安心したらお腹す

「いちゃった…」

翔が笑顔を見せてそう言うと、明奈も笑顔になる。

「うん！行こう！私もお腹すいた…。一日中のエネルギー使い果たした気がする…」

翔と明奈は実験室を後にした。

これから、2人の穏やかで楽しくて、ちょっとおバカな日々が始まる…

vol.5 告白(後書き)

やっと明奈と翔をくつつけることができました。この小説でメインにしたいのは、恋人同士になってからの日常生活なのですが、短くても、やっぱり出会いから告白までの部分は必要かなと思いついて、vol.1〜5を序章のような形で描くことにしました。それにしても駄文で申し訳ないです…。

お知らせ

vol.6以降は、時系列に話が流れるのではなく、ある日の出来事を単発で描いていきます。そのため、翔と明奈の親密さにバラつきが出るなどの不具合が出るかもしれませんが、ご了承ください。実は、ここから私のチャレンジしたい部分であります。vol.5までは序章ととらえていただくとちょうど良いです。

〈独り言〉

文章を作るのがこんなにも難しくって時間がかかるとは…。どれも駄文で、ストーリーもへんてこだ…。とくにvol.3とvol.4なんて、ひどすぎる…。でも、せっかく書いたんだからお蔵入りさせるのはもったいないし…。はあ、もっと文才がほしい(笑)

vol.6-diary1 ゲームセンターで…(前書き)

これは私が初めて書いた作品です。当時はvol.1〜5を書こうとおもっていませんでした。ちょっとだけ修正してメイン作品の第1話とさせていただきます。

この日、明奈と翔はゲームセンターに遊びに来ていた。

12時に待ち合わせをして、ファミレスで昼食を食べ終わると、明奈が「ゲーセン行きたい」と言い出したのだった。

「でもなんか意外。明奈ってゲーセン好きなんだ〜。」

「うん！割と行くよ。小学生の時は、あれ大好きだったな。ほら、銃で敵をどんどん撃つてくヤツ…。でも、いつつ第2ステージの直前でやられちゃってさ〜。あと、救急車を運転して患者さんを病院に運ぶゲームがあったんだけど、私全然上手に運転できなくて、通行人轢きまくっちゃってたな……。」

「明奈…。」

また、明奈の新たな一面を知った翔であった…。

* * *

「見て！あのピカチュウかわいい！私あれほしい!!！」

少し離れた場所にあるUFOキャッチャーに20センチほどの大きさのピカチュウが並べられているのを見て、明奈が明るい声で言う。

「ホントだ〜。僕もほしいな〜。」

2人ともポケモンが大好きなので、一気にテンションが上がる。

「一緒に取ろうよ!」

「よし!頑張ろう」

まずは、翔が1000円を入れた。

このUFOキャッチャーは透明な板の上に景品が乗っていて、すぐ手前が景品口になっているので、景品をつかむというよりは落とす形式のものであるようだ。

翔はアームを慎重に目的のピカチュウの上に動かした。

アームが下りてピカチュウの後方を掠める。

ピカチュウが前方に押し出された。

「やった。いける!」

…と、明奈が言ったものの景品口に落ちる直前でピカチュウが止まっていた。

「あゝ、惜しかったのに…」

少し残念そうな翔。

明奈はちょっとがっかりしたものの、すぐに元気を取り戻す。

「よし、次で絶対取るよ！」

明奈が100円を入れる。

翔と同様、慎重にアームを動かす。

が、

「あつ…ミスった…」

アームをピカチュウのやや前方で止めてしまったため、再びピカチュウが後方に下がってしまった。

「翔…ごめん…今の絶対取れてたよね…」

ちよつと落ち込み気味の明奈。

「気にしないでいいよ、明奈。せっかくカワイイの見つけたんだし、もうちよつと頑張ってみよう」

「うん、ありがとう」

明奈は何だか心が温かくなるのを感じた。

その後、翔が再度チャレンジするものの手ごたえはなく、今度は明奈がピカチュウを前方に移動させることに成功したが、翔が再び後方に戻ってしまった。

「明奈、ごめん。」

「うっん、もう少しだけ頑張ってみよう」

2人はこんな調子で緩い会話を続けながら交代でチャレンジし続け、ついに翔の6回目の挑戦で無事にピカチュウをゲットすることが出来た。

「やったー、ピカチュウゲットだぜ！」

明奈がポケモンの主人公サトシの真似をしてガッツポーズをすると翔も嬉しそうに笑った。

* * *

ゲームセンターから出ると、雨が降っていたので、2人は翔の部屋で過ごすことにした。

のんびりおしゃべりしているとやがてUFOキャッチャーで取ったピカチュウの話題になる。

「ピカチュウ取れてよかったね。2人で1000円も使っちゃったけど…」

明奈が翔が取ったピカチュウの頭を撫でながら言う。

「でも、1000円以上の価値はあるんじゃない？ ほら、その共同作業っていうか…」

翔の頬が少しだけ赤く染まっているような気がした。

「うん、そうだね!」

明奈は、特に照れる様子はなく嬉しそうに答える。しかし、

「あっ…」

急に悲しそうにそうつぶやいた。

「どしたの?」

すぐに翔が聞くと、

「ピカチュウ2つ取ればよかった…。私の分がない。」

明奈がそう言うのと翔もすぐにそのことに気づく。

「あっ…ホントだ…。でも、これは明奈にあげる…っていうかもとも明奈のだよ!」

「でも、せっかく翔が取ったのに…」

遠慮がちな表情の明奈…。

「そうだ!大丈夫。ちょっと待って…」

そついうと翔は急に部屋から飛び出してしまった。

明奈は何が何だか分からず、呆然と翔を待つ。

5分ぐらいたっただろうか。

翔が部屋に戻ってきた。

明奈は翔の姿を見て目を見開く。

「ほら、僕にはこれがあるから」

冗談めかした笑顔でそう言う翔はピカチュウの着ぐるみを着ていた。最初は戸惑っていたような表情の明奈だったが、おなかを抱えて笑いだした。

「アハハハッ…めっちゃ似合ってる。翔、何それ…何でそんなの持ってるの…！？ それなら、単位落として退学になっても、遊園地とかでいくらでも雇ってもらえるよ…アハハッ」

「最後の一言は余計だよ…これは弟と遊ぶのに買ったの。プーさんとガチャピンのもあるんだよ」

「へえ〜相変わらず仲いいね」

「だから、ぬいぐるみは遠慮せずに持って帰って^^」

「ありがとう」

翔は優しくうなづき、明奈に訪ねた。

「ねえ、お腹すかない？」

「うん、お腹すいた！」

時計を見るとまだ4時だったが、2人はお昼に入ったファミレスへ再び向かった。

* * *

(店員：いらつしゃいま…)

(翔：あっ、着替えるの忘れてた！)

(明奈：ごめん！あまりにも似合いますぎてたから私も全然気にしてなかった！！)

vol.6-diary1 ゲームセンターで…(後書き)

私の初めての作品…やはり、なんだこれ？という感じですね。
vol.7以降で文才を得たいものです…。

vol.7-diary2 特効薬

ある日の土曜日の午前11時…

翔は待ち合わせ場所のファミレス前で明奈を待っていた。

ガラスケースの中に陳列されているメニューのサンプルを見る。

(何食べよっかな。あつ、シーフードカレーおいしそう!…でも、これからお魚見に行くのにな…)

今日は水族館デートをする予定だったのだが…

くくく

携帯が鳴って、メールが入る。

(明奈からだ!)

<<Sub:じゅめん(くく)

<<風邪をひいてしまいました(;|;))

熱もあるし、具合も悪いので、今日は家で大人しく寝ることにします。

もうファミレスの前かな!? 連絡遅くなってごめんね…

実は、ギリギリまで具合悪くても行くつもりでいたんだ。

でも、これは無理っ!と思って…(@_@:)

それで体温計使ったら、案の定、熱がありましたm(_) m

本当にごめんなさい(;' ;)

- E N D -

(明奈: 大丈夫かな…)

翔はメールを見てとても心配になった。

そして、すぐにメールを返す。

<<Re: ごめーん(< _ >)

<<えっ! 明奈大丈夫!?

今からそっち行くから! 待ってて!

翔はすぐに自転車で明奈の家の方向に向かった。

途中、明奈から「申し訳ないから、わざわざ来なくていいよ」< > うつしちやったら大変だし！」というメールが来ていたが、それには気付かなかった。

* * *

ピンポン…

玄関のチャイムが鳴る。

(翔？ 来なくていいって言ったのに…)

明奈はベッドから起き上がり、玄関に向かう。

のぞき窓を見ると、やはり翔だった。

明奈はそっとドアを開ける。

「翔…」

「…明奈、大丈夫？…ごめん！…逆に起こしちやったかな？」

翔は、頬と目が赤くなっている明奈を見て、心が痛んだ。声にも元気がない。

「ううん、ありがとう。」

来なくていいとは言ったものの、明奈は翔が来てくれて本当に嬉しかった。

一人暮らしで、具合が悪くて苦しいのに誰にも看病してもらえないのは、寂しく心細かったのだ。

それに、楽しみにしていた水族館デートが出来なくなって、かなりがっかりしていた。

「起こしてごめん。横になりたいよね。」

翔は、明奈の肩を抱きながらベッドまで付き添う。

再びベッドに横になる明奈。そして、翔の目をそっと見つめながらこう言った。

「翔が来てくれて何か安心した…。ちょっと恥ずかしいけど…」

本心からそう思っているのだと、明奈の表情でわかる。

「…良かった。何か食べた？」

「ううん、食欲なくて…」

「そっか。でも、水分は取らなきゃだめだよ…。うちに飲み物ある？」

明奈は首を横に振る。

「じゃあ、僕、何か買ってくるね。何か買ってきてほしいものある？」

「何でもいいよ。わざわざありがとう。」

「わかった。そうだ！台所使ってもいいかな？」

「良いけど…」

「ありがとう。とりあえず、水用意しておくね。」

翔はコップに水を入れ、ベッドの横に置いた。

「じゃあ、行ってくるね。」

翔は明奈に布団を掛け直してから、玄関へと向かう。

明奈はそんな翔の背中をじっと見つめた。

* * *

具合が悪いし、身体も重い…けれど、翔の優しい表情を見ると、明奈は精神的に楽になった。

しかし、翔が買い出しに出かけてしまって、ちょっとした間だとわかっていても寂しい。

(翔…早く戻ってこないかな…)

その時…

「ただいまー」

翔の声が聞こえる。そして、まもなく姿を見せた翔は明奈のもとへ行く。

「早速キッチン借りるね。具合はどう？」

「まだ気持ち悪いけど、翔の顔見たら大分楽になったよ。」

明奈の顔はまだ赤いままだ。翔は怪訝そうな顔をする。

「本当だよ？」

明奈が翔の目を見つめながら言った。

「そっか、良かった…。もうちょっと、待っててね。」

翔は恥ずかしそうにキッチンへと向かった。

…しばらくすると、翔が4つのコップをお盆に乗せて明奈の元へやってきました。

「これなら飲めるかな？」

お盆の上には、野菜スープとホットはちみつレモネードが2つ乗っていた。

(すごい…翔…こんな作れたんだ…！)

明奈が嬉しそうにほほ笑む。

「わ〜おいしそう！翔、ありがとう。」

「どういたしまして。でも、おいしいかどうかわからないよ。」

「飲んでみよーっと。いただきます。」

明奈はホットはちみつレモネードを口に入れた。

甘酸っぱい香りが口いっぱいに広がる。

「翔、おいしいよー！」

「そう、それは良かった。」

続いて野菜スープも口に入れる。

「こっちもおいしいー！」

「良かった。よし、僕も食べてみよーっと。」

…翔と明奈は野菜スープもホットはちみつレモネードもあったという間に飲んでしまった。

* * *

翔がキッチンで片付けを終えて明奈のもとに戻ると、明奈は気持ちよさそうな寝顔で眠っていた。

(お腹いっぱいになったから、眠くなっちゃったんだ…)

布団を掛け直した後、起こさないように明奈の髪をそっと撫でる。

そして、まだ赤い頬にそっと口づけた。

(明奈…大好きだよ)

(僕も何だか眠くなっちゃったな…)

* * *

3時間後、明奈が目を覚ますと翔が頭だけベッドに乘せて眠っていた。

明奈の左手は翔の左手に包まれている。

(翔は寝顔まで優しいんだね…ずっとそばにいてくれてありがとう)

身体はすっかり軽くなっている。熱もおそらく下がっただろう。

空いている方の手で翔の髪を撫でる。…翔はまだ起きそうにない。

左手を離すのが惜しくて、明奈はもう一度眠りについた。

このあと、同じ夢を見た2人…それが正夢だとわかるのはもっとも
っと先の未来の話。

vol.7-diary2 特效薬(後書き)

本来はギャグ甘にする予定だったので、ギャグを入れる気分にはなれませんでした(笑)

よくありそうな話ですが、悪しからず…

しかも、無理やり終わらせた感丸出しで申し訳ないです。

vol.8-diary3 キミのトモダチ(前書き)

翔の友達顔を初めて見た明奈は…？

明奈は大学の正門の前で翔を待っていた。

この日は明奈も翔も3限で授業が終わるので、その後、一緒に遊びに行くことにしていたのだ。

明奈が正門に着いてから5分後、現れたのは翔…ではなく、見知らぬ青年だった。

「やあ、明奈ちゃんだよ。俺、翔の友達の上原翼って言います。」

「…は、はい…。」

明奈は翼の姿を見て愕然とした。明るい茶髪に銀色のピアスとネックレス。「チャラ男」「不良」といった言葉が明奈の頭の中を駆け巡る。

(…こ、こんな男が翔の友達!?)

高校時代の友達の中に翼という人がいるということは翔の話を知っていた。だが、こんなチャラ男だったとは…

「あ、あの…本当に翔の友達なんですか!？」

明奈はちよつと威嚇ぎみになって確認する。

「ほ、本当だよ…。(俺、何か怒らせるよつなことしたかな…)」

明奈の態度に戸惑う翼。

「そうですか…。で、何の用ですか？」

明奈は依然として不愉快そうだ。翼はゆっくりと口を開く。

「えっと、俺と翔、3限は同じ授業なんだけど、プログラミングの授業でさ、終わった人から帰れるんだよ。でも、翔まだ終わってなくてちよっと遅れるってさ。伝言頼まれたんだ。」

「…そうですか。教えてくれてありがとうございます。」

「そういうことだから…。それじゃあ、さよなら…。」

明奈は一瞬、申し訳なさそうな表情になったものの、早く帰れオーラが漂っていたので、翼は足早にその場を去った。

その5分後、明奈のもとに翔からメールが入る。

<<明奈、今課題終わったよ。すぐ行くから！遅くなってるごめん
>>）

（翔…何であんな人と友達なんだろう…。翔って本当は…悪い…いや、そんなことない！）

もうすぐ翔に会えるというのに、明奈は翼のことが引っかかっていなかった。

* * *

「明奈、どうしたの？ 今日は何だか元気ない気がしたけど…」

「えっ！うっん、そんなことないよ！」

デートを終えて、明奈の家への帰り道、翔と一緒に歩いていてもなんだか落ち着かない。目の前の翔はいつもと変わらない優しく穏やかで天然な男の子だ。それなのに、どうして…。長らく男性不審だったため、明奈は男性に対して人よりかなり疑り深い。今まではそれで良かった。その方が良かった。…だが、今は友達の印象だけで自分の恋人を疑ってしまう自分が悔しかった。

「明奈、そういえば、翼と会ったの初めてだった？」

「あっ！…うん、そうだよ。」

いきなりその名前を出されて驚く。

「その…大丈夫だった？」

「えっ…（なんでそんな聞き方するのかな…）…正直、怖かったかな…」

すると、翔はクスツと笑った。

「やっぱり。」

「…（何で笑うのさ！！）」

「あのね、実は…僕も初めて会った時、全く同じこと思ったんだよね。」

「えっ？」

「だけどね…」

翔はあるエピソードを話し始めた。

* * *

高校の始業式の日…教室で翔の隣に座っていた少年が翼だった。

服装はやはり明るい茶髪に銀色のネックレスとピアス…

(何か怖い子だな…友達になれそうもない…)

翔は翼と関わろうとしなかった。

そのオーラを感じたのか、翼も翔に話しかけてくることはなかった。

…その1週間後

「ただいま…どうしたの？」

「優也が帰ってこないの。」

翔の家では、幼稚園に通っている弟、優也が帰ってこないと母が心

配っていた。

母の話によると、帰りのお迎えに行ったところ、「遊びに行ってくる」と言って、そのまま友達と走り出してしまったらしい。

翔も不安になった。

「もう日も沈んでるし、帰ってこないとおかしいよね。僕、ちょっと探してくるね！」

「あつ、ちょっと…」

翔が家を飛び出そうとしたと同時に、玄関のチャイムが鳴った。

翔がドアを開けるとそこにいたのは、翼だった。

(ど、どうして…！)

しかし、視線を下にするとそこには頬に涙の跡がついた優也がいた。

「優也！大丈夫だった!？」

翔はしゃがんで優也と同じ視線で優しく尋ねる。

優也は大きくうなずく。それを確認した翼が、口を開く。

「そうか、長瀬って…隣の席の…まあ、いいや。この子、カバンについてたピカチュウのキーホルダーあっただろ。それ落としちゃったみたいで、探してたら迷子になったらいいんだ。カバンの中の幼稚園手帳見たら、ここの住所が書いてあったから…」

「そうだったんだ…」

翔が安堵の表情を浮かべる。

「そう。このお兄ちゃんが助けてくれたの。これもくれたんだよ！お兄ちゃん、ありがとう。」

優也が翼に向かって嬉しそうに笑う。手には、なくしたキーホルダーよりも一回り大きいピカチュウのマスコットがあった。

「こんなものまでもらって…本当にありがとう！」

翔も笑顔でお礼を言う。

「いや、ゲームセンターで一発で取れたヤツだから気にするなよ。優也君、今度から気をつけるんだぞ。」

翼が裕也の肩をポンポンとたたく。

「うん！」

「じゃあな。」

優也と翔の顔を一瞥すると、翼は帰って行った。

* * *

「…そういつわけで、翼はすごく良い子だったんだよ。次の日から学校でも話すようになったんだけど、全然普通の子で…。人は見かけによらないってまさにこのことだね。だから、明奈も安心して。」
翔の話聞いて、明奈の心から不安が消えていった。

* * *

その5日後…

明奈と翔と翼の3人は学食で食事をしていた。

「翼くん、この前はあんな態度取ってごめんね。見たくて人を判断しちゃいけないって反省したよ。」

「僕も翼のこと先に詳しく話しておけばよかったね。」

明奈の隣に座っている翔がそう言うと、その向かいに座っている翼が口を開いた。

「いや、いいよ。やっぱり、俺の見た目って、アレなんだな…」

「ううん、もう大丈夫だよ。翔に翼くんの良いところいっぱい教えてもらったから。ねえ、翔」

「うん、あまり言ってなかったけど、僕も実は初めて翼見たとき、怖くて絶対友達になれないって思ったんだ。でも、翼は本当は優しいってことちゃんと明奈に伝えたから。」

「そ、それはどうも…（結局、俺の見た目についてはフォローしてくれないのね… それにしてもゆるいカップルだなあ…）」

翼がそう言つと、翔が突然あくびをした。

「ふああ、眠いや。」

隣の明奈もあくびをする。

「私も…。朝まで一緒だったもんね。」

明奈がそう言つと、

「あ、朝まで…」

翼が一瞬戸惑う。

（…そ、そうだよな。カップルだもんな。そういうこともあるよな…。うん…。）

「うん、僕我慢できなくてさ…」と翔。

「私も…」と明奈。

「え…（は、はい）？ 突然なんだってんだよ！」

翼はさらに戸惑う…。ゆるくてかわいいカップルだと思っていたのに…

「頼む！それ以上その話を進めないでくれ！君たちの口からそんな話を聞きたくないっ！」

翼は必死に静止する。…が、明奈が口を開いた。

「えっ、朝までジグソーパズルするのってそんなにいけない？」

「…ジグソーパズル？」

翼の体から力が抜ける。

「うん。デパートですごくカワイイ』となりのトトロ』のジグソーパズル見つけてさ、明奈の家でやってたんだよ。ちよっとずつ進めるつもりだったんだけど止まらなくて…。結局朝までやっちゃってさ。…眠かったけど、楽しかったし、全然平気だよ。」

翔が嬉しそうに話す。

「そうか、それは良かったな…（良かった！かわいいカップルで本当に良かった！）…ところで、明奈ちゃん、これからよろしくな。」

翼がそう言つと、

「うん、よろしく！」

明奈が心からの笑顔でそう答えた。

vol.8-diary3 キミのトモダチ(後書き)

お粗末さまでした…。最後のネタ…何かごめんなさいm(――)m
まじめな友達 or 私のことをまじめだと思っている友達には
見せられないな(笑)

vol.9・diary4 ドキドキプレゼント(前書き)

明奈の誕生日に翔が選んだプレゼントとは…

そして、別の場所でも気持ち動き出す…!?

とある、月曜日…

明奈は友人の沙枝と一緒に学食で昼食を食べていた。

「明奈、今度の木曜日、誕生日だね」

「うん、でもその日講義が4限までびっちり入ってるんだよね…」

明奈がそう言うと、沙枝が尋ねる。

「でも、翔君には会っくんでしょ？」

「うん、もちろん」

「楽しみだね」

沙枝がそう言うと、明奈が嬉しそうにうなずいた。

その時、たまたま2人を見つけた翔の友人の翼が声をかけてきた。

「やあ、明奈ちゃん」

「あつ、翼君。…沙枝、会っの初めてだよね？」

明奈が沙枝の方を見て確認すると、沙枝は案の定、複雑な表情をしていた。

翼の方も誰にも聞こえないような声で「やっぱり…」とつぶやく。

明奈は、必死に説明する。

「あ、あのね…翼くんは翔の友達なんだ。見た目は…その、ピアスとか茶髪とかで…チャラ男にしか見えない…っていう感じだけど、すっごく優しいの!」

「明奈ちゃん…はつきり言うね…」

再び小さな声でつぶやく翼。

しかし、沙枝は、明奈の言葉をすぐに信用した。

「へえ、翔君の友達なんだ。人は見かけによらないっていうもんね。これからよろしく」

「うん、よろしく」

翼はそう言つと、何か買ってくるからと一旦その場を離れた。

すると、沙枝は明奈の耳元でこう囁いた。

「つまり、翼くんって見た目はワルだけど、中身はすっごくいい子ってパターンってことだね。私、そう言うのに弱いかも…」

「えっ…?」

明奈は沙枝の顔をじっと見つめた。

* * *

「誕生日プレゼントってそれかよ〜!？」

翌日、翔が明奈の誕生日プレゼントに選んだものを見て、翼は困惑した。

「うん、シェイミのランドフォルムとスカイフォルムのぬいぐるみセツト!しかも、これ喋るんだよ!」

ちなみに、シェイミとはポケモンの1種で、とてもかわいらしい形態のランドフォルムと、かわいさと凛々しさを持ち合わせた形態のスカイフォルムという2つの姿をするという特徴がある。さらに、荒れた土地を一瞬でお花畑に変えてしまう能力を持っているポケモンだ。

「明奈はこのポケモンが大好きなんだ。だから、これ見つけたとき、すぐに『これだ!』って思ったよ!」

翔はすっかり嬉しそうにしている。

(大学生におしゃべりぬいぐるみをプレゼントか…)

翼は少し不安になったが、翔の表情を見るとあまり悪いことも言えなかった。

「そうか…明奈ちゃん喜ぶといいな」

翼の言葉に、翔はプレゼントを見つめながら、大きくうなずいた。

* * *

その翌日…

翼が空きコマの時間を潰そうと学食に行くと、同じことを考えていた沙枝が一人、席についていた。

「やあ、沙枝ちゃんちょっと良いかな？」

「あっ！どうぞ」

翼の声に気付いた沙枝が、嬉しそうに言った。

「…そんなわけなんだけど、どう思う？」

翼は、翔が明奈に選んだプレゼントについて相談していた。

「うーん、どうだろうね…」

沙枝も何とも言えないようだった。

「だって、対象年齢3才以上って書いてあったぜ。これじゃあ、恋人へのプレゼントって言うより父親から娘へのプレゼントだよな…」

「うん、確かに明奈は3才以上だけどね…」

「しかも、漢字に全部ふりがなが振ってあってさ…こんなのプレゼントしたら、さすがの明奈ちゃんも呆れちゃうんじゃないかって心配で…俺、翔が悲しむ顔見たくないんだよ」

「なるほど…。そう言われると、ちょっと私も心配になってきたな…。でも、きつと大丈夫だよ。明奈は、そのシェイミってポケモン好きなんでしょ？ それに、明奈はカワイイもの大好きだし！」

「そっか…俺が心配しすぎなのかな…」

翼がそう言つと、沙枝が神妙な顔つきで口を開く。

「翼君つてさ…」

「ん、何？」

翼の方も思わず真剣な顔になってしまう。

「すつごく、優しいんだね!！」

沙枝は明るい笑顔を見せて、そう言った。

「えっ、いや、そんなことは…」

翼はそんな沙枝に、瞬間見惚れた。

* * *

明奈の誕生日当日…

「明奈、誕生日おめでとう！」

「ありがとう、翔」

講義が終わり、2人は明奈の家に行った。

「これ、明奈に…」

翔はそっとプレゼントを渡す。

「やったー！ありがとう。…開けても良い？」

明奈が尋ねると、翔はそっとうなずく。

プレゼントを開ける明奈…。中身はもちろんシェイミのおしゃべりぬいぐるみ…。

ドキドキする翔。

プレゼントを見た明奈はパーっと笑顔になった。

「わー！かわいい！翔、ありがとうー！」

明奈は翔に抱きつく。

（喜んでくれて良かった！！）

明奈を抱き止めた翔はとても幸せだった。

* * *

次の日、明奈と沙枝は学食にいた。

明奈は嬉しそうにぬいぐるみを喋らせて遊んでいる。

「これシェイミが映画で言ってたセリフなんだよ」

「へえ、…まあ、翼君の心配は結局、杞憂だったわけだ」

沙枝がそう言うと、明奈が不思議そうな表情になる。

「いや、あのね、大学生にそんなのプレゼントしたら、明奈、呆れて翔君のこと嫌いになっちゃうんじゃないかって。翼君、心配してたの」

沙枝が説明すると、明奈がおかしそうに笑った。

「そつか。でも、確かにちょっと変だよ。最初にこれ見たときは、正直『えっ?』って思った」

明奈は話を続ける。

「ただどね、そう思ったのは一瞬だけ。翔が私のためにプレゼントを選んでくれた。“女の人が喜びそうなもの”じゃなくて“私が喜

びそつなもの”を選んでくれた。そう思ったらすごく嬉しくて…。昨日、翔と別れてから、何か涙が出てきちゃったんだ。」

そう語る明奈の表情はとても幸せそうだった。

「明奈、本当に良かったね！」

沙枝の言葉に、明奈はプレゼントを見つめながら、大きくうなずいた。

vol.9・diary4 ドキドキプレゼント（後書き）

相変わらずの乱文で失礼します。

「女の人って何をプレゼントしたら喜ぶのかな？」という視点ではなく、「睦月詩音”には何をプレゼントしたら喜ぶのかな？”という視点で、恋人にはプレゼントを選んでもらいたい…私の個人的な思いから、この作品を作りました。

「ちょっと！合コンなんて聞いてないんだけど！」

高校の頃の友人4人と一緒に居酒屋に入った明奈は、店員に案内された場所に座っている男性5人の姿を確認すると、不快感をあらわにした。

「いいじゃん。数足りないんだから付き合ってよ。どうせ彼氏いないでしょ。良い機会じゃん。」

「いつまでも、『男は嫌い』とか言っていないで、彼氏作った方が良いつて。」

「大学生にもなって、恋愛しないなんて、マジありえないから。」

「みんなで、彼氏作ろうって言って頑張ってるんだよ。何で明奈だけ冷めてるわけ？」

友人たちに、反省の色は全くない…。

この友人4人は高校の頃、2番目によく関わっていたグループだ。あまり目立つタイプの子たちではなかったが、一緒に勉強したり、遊んだり、仲が良かった。

しかし、卒業して、進路がみなバラバラになると同時に、4人も一気に派手になり恋愛至上主義になった。

そして、明奈の男性不信を理解して付き合っていたはずの友人たち

は、一転して、「誰が最初に彼氏作るか競争しよう。」と言いだし、明奈に彼氏を作ることをしつこく勧めるようになった。さらに、何度断っても、明奈の大学の男子学生を紹介するようしつこく頼まれた。もはや、明奈と彼女たちの価値観は正反対だった。いや、正反対であるのは問題ではない。問題なのは、彼女たちが明奈の価値観を受け入れずに、自分たちの考えを押し付けてくることだ。

それでも明奈は、彼女たちと付き合っていた。一緒に作ったホームページを更新する、誕生日はみんなで祝うなど、高校生の頃からの慣習が続いており、これからもずっとそうしなければならぬ気がするからだ。

友人たちも明奈とは合わない、もう明奈といってもつまらないと感じている。それは明奈だって気づいていた。それでも、明奈と縁を切らないのは、やはり高校生の頃からの慣習と、明奈の大学の男子生徒と出会う可能性が減ってしまうという理由からだ。

今日は「久しぶりにみんなが集まって語ろう」と誘われたのに、来てみたらこの様であった。

「…とにかく、いつも言ってるでしょ！ 私は簡単に彼氏作ったり、合コン行ったりするのは苦手なの！それに私には…」

翔のことを話そう…そう思ったが、あれこれ根掘り葉掘り聞かれるのは、面倒くさすぎる。それに、彼女たちの性格上、口では「彼氏作りなよ」と言っておきながら、明奈に彼氏がいると知れば、陰悪なムードになるのは目に見えている。

「…なんでもない。…とにかく、私こういっなのは苦手だから、帰る…」

「おーい、女子〜。早くしろよ〜。」

「ほら、とつとと座る、座る〜。」

男性陣の一人の声を聞くと、友人が半ば強引に明奈を一番右の席に座らせた。

* * *

15分後：

友人たちはすっかり合コンを楽しんでいる。

明奈は、帰る言い訳を考えながら、男性の質問に適当に答えたり、友人の女らしさアピールや男性の自慢話に適当にうなずいておいたりした。

男性陣は皆、20代前半の社会人のようだ。どうやら就職した友人の知り合いらしい。別の友人が「今度ドライブ行こう。奢ってやるよ。」「夜、空いてる？」などと誘われて喜んでいる…。

そうだ！翔に迎えに来てもらおう！

名案だ！と思った。翔が来てしまえば、誰も明奈を止めることなんてできない。

早速、翔に事情を説明するためにメールをすることにした。

しかし、カバンから携帯を取り出した途端、正面に座っていた男が、いつのまにかそばに来ており、明奈の携帯を持っている方の手首を掴んだ。

「いやっ！」

「ねえ、アドレス教えてよ。君、おしゃべり苦手みたいだし。メールなら良いでしょ。」

明奈は恐怖を感じ、

「嫌です…。離して下さい。」と言っのがやっとだった。

男は「カワイイくせして…。」などとブツブツ呟きながら不機嫌そうに自分の席に戻って行く。

「え〜、何で断っちゃうの〜。」

「せっかく、アドレス聞いてくれたのに〜。」

横から友人の不満の音が聞こえる。

「ちょっと私、トイレに行ってくるね。」

まだ恐怖が残っている明奈は、逃げるようにして、カバンを持ってあわててトイレに駆け込んだ。

* * *

用を済ませて、トイレから出ようとした瞬間、気付いた。

言い訳など、必要ない。このまま帰ってしまえばいいのだ。

(どうして今まで気づかなかったのだろう…)

明奈は歯がゆい思いをしたが、後悔しても仕方ない、すぐに帰ろうとトイレから出て、店の入り口に向かおうとした。

ところが、トイレ付近の曲がり角に先ほどとは別の男の姿があった。

「ねえ、明奈ちゃんって言ったよね？俺にはアドレス教えれくれるかな。」

またか…明奈はそう思って、男にこう言い返した。

「私、誰にも教える気ありませんから…。」

すると、男は強引に明奈をトイレ側の壁へ引っ張って行った。

「いいじゃん。俺、明奈ちゃんのかわいくて控えめなところに惚れちゃったんだ。」

彼女になってほしいんだよ。明奈ちゃん、大事にしてあげるからさ

…。」

そう言って、顔を近づけて、じっと見つめてくる。

「ちょっと電話掛けるんで…」

強引な男の行動に恐怖を感じた明奈は男を押し退けた。そして、今度こそ翔に連絡をして、迎えに来てもらおうとした。

携帯を取り出して、翔の電話番号にダイヤルする。

「もしもし、明奈、どうしたの？」

「あつ！も、もしもし、翔、あ…あのね…」

しかし、その瞬間携帯を男に取られ、切られてしまった。

「まだ、話の途中でしょ。なに、明奈ちゃん、もしかしているんな男と遊んでるの？」

そう言っつて、男は、明奈の肩を抱き、お腹を触ってきた。

「だったら、今日の夜ぐらい俺と遊んだっていいじゃん。」

明奈は恐怖で声が出なくなってしまった。

(どうしよう…誰か助けて…)

その時…

「ちょっと明奈、私の彼と何してんのよ！」

友人の1人がやってきてそう言った。…すると、その後ろからさらに別の友人が近づいて、前の友人の肩を掴んだ。

「はあ、アンタこそ何言ってるのよ。今日の夜、一緒にいるって私が約束してるのよ。」

「何よ。私は今度ドライブ行っちゃって約束してるんだから！」

「ちょっと、どういうこと？」

友人がケンカを始め、男が呆然としている間に、明奈は男の手から携帯を奪い、店を飛び出して、全力で走った。

* * *

その後のことは、よく覚えていない。夢中で走って、夢中で地下鉄に乗って、気が付いたら自分のアパートの入り口だった。

中に入ろうとすると、その前に、誰かが出てきた。

「…翔？」

そこにあっただのは、翔の姿だった。

「どうしてここに？」

明奈が消え入りそうな声で尋ねる。

「電話…心配だったから。様子が変わったし、掛け直しても、メールしても、反応なかったから。どうすればいいか分からなくて…。」

家にいる感じではないとは思ってたけど…でも、他にどこ行けばいいか分からなくて…家に行ってみた。…それより、寒いから中に入るう。ねっ。」

「…うん。」

明奈は、翔と一緒に部屋に入ると、安心して座りこんだ。

翔はその横に座って、

「明奈、どうしたの？」

と尋ねる。

いつもの優しくできてきれいな瞳。

その瞳を見て、安心した明奈の目から涙が流れた。

そして、翔に抱きついて、その胸の中で声をあげて泣き出した。

「翔…ううっ…怖かったよ……」

翔は優しく明奈の髪を撫でる。

「明奈…大丈夫だよ。もう大丈夫だからね…」

明奈は翔の温かくて優しいぬくもりにずっと包まれていた。

* * *

「だいぶ、楽になった？」

「うん…」

しばらくして、落ち着くと、明奈は今日の出来事を話し始めた。

じっと耳を傾ける翔。

「そっか。大変だったね。」

翔は明奈を思いやるようにそう言い、さらに話を続けた。

「その…無理することないんじゃないかな？」

「えっ…」

「明奈のこと、本当に思ってくれる友達、たくさんいるから。今日の子たちは、いつも話してくれる本当の仲良しグループの子とは違う子たちなんですよ。それに、沙枝ちゃんは、明奈の一番の親友だよ。あと、翼だって力になってくれるし。それから…その…僕もいるから！ 本当に明奈のこと思ってる人、ちゃんといるから。だから…無理しすぎるのは良くないと思う。」

「ありがとう、翔。私も翔が困った時にちゃんと助けられる人間になるね…。」

「いつも助けてもらってるよ。計算とか、漢字とか、計算とか…」

「そういうんじゃないかってさ…もっとこう…」

その時、明奈から空腹を知らせるサインが聞こえた。

「わー、恥ずかしい。」

明奈は両手で顔を隠す。笑いだす翔。

「アハハハハッ。大丈夫。何か食べに行こうよ。こういつときはおいしいもの食べるのが一番だよ。」

「うん！今日はデザートも食べてやる！」

明奈と翔はいつものファミレスへと向かった。

これは友達が合コンに行つて経験したことや自分の友人関係を少し参考にして書きました。友達の話を聞いて、筆者はますます男性が怖くなりました(;;) 本当に翔くんみたいな無害な人がいればいいのですが…

それから、今まで書いてきていつも思うのですが、私の頭の中の翔くんは、ここまでバカでもかわいくもないんです。確かに天然でかわい系の設定ではあるのですが、文章にするとどうしてもその部分が強く出すぎてしまつんです。明奈ちゃんも、私の頭の中では、弱い感じではなく、本当はちょっとSっ気がある感じなのですが…。私の文章能力は著しく低いようです…。

VOI・111・diary 6 ミニトーク(前書き)

思いつきで書いてくだらない話です…

「あつ、翼君だ。」

明奈が講義を終えて、学食に行くと、翔の親友、翼の姿があった。

「やあ、明奈ちゃん。次、空きコマ？」

「うん。」

「俺もそうなんだ。」

「そつか。じゃあ、ここ座っていい？」

「もちろん。」

明奈は翼の向かいの席に座った。

しばらく、とりとめもない話した後、明奈が口を開いた。

「ねえ、翼君。ずっと、気になってたことがあるんだけど…」

明奈の声のトーンも少し低くなる。

「何？」

翼が明奈に聞き返すと、明奈は日頃の疑問をぶつけた。

「翔って…よく大学に入れたよね。」

「あつ、ああ…」

「だって、計算とか漢字とかさ…」

「うん、言いたいことは分かる。」

翼は話を続ける。

「漢字はさ、正直理系だったら、センター試験の時だけじゃん。だから、受験の致命傷にはならないだろ。けど…計算に関してはな…、運としか言いようがない…」

「運？」

「普段はあの通り、間違っばっかりだけど、『テスト』という名の付くものをする時は、驚異の正確さを発揮するんだ。」

「ふーん。…あつ、わかった。計算の方法は分かっているけど、計算するときの注意力が普段はどうしても欠けちゃうんだね。」

「詳しいことは分からないけど、まあ、そんなところかもな。ちょっと変わったヤツだけど、バカではないと思うよ。」

「なるほど。…この前もね、一緒に鍋したんだ。その時に一緒に材料買ったんだけど、ちょっと離れた所から『スイサイいる？スイサイ？』って聞いてくるの。スイサイって何だろうって思ってた見たら水菜だったの。スイサイって聞いたことないから違うってわかると思うんだけど… それとも、最初は誰でも間違えるのかな？」

「翔らしいな。アハハハハッ…!!」

爆笑する翼。

「私、たまに翔の頭には脳みそじゃなくてカニみそが詰まってるんじゃないかって思ったりするんだ。」

「ハハハッ、あながち間違っていないかもな。そう言えば、カニみそってカニの脳みそだっけ？」

「違うと思う。確か内臓じゃなかったかな。」

「そっか。俺はカニみそというよりは、アイスクリームが詰まってると思うぜ。」

「アイスクリーム？」

「翔、たまに甘くてカワイイことしたり、言ったりするだろ。この前、映画見て、『風船付けて飛んでみたい!!』とか言ってたし、ほら、明奈ちゃんの誕生日プレゼントだって…。」

「なるほどね…。アハハハハ…!! そっちの方が当たってるかもっ！」

「アハハハハ…!!」

明奈と翼が笑っていると…

「2人とも、何、盛りあがってるの？」

講義を早めに終えた翔がやってきた。

「あっ、翔、あのね…昨日のお笑い番組の話してたの!!」

「そうそうそうそうそう…!!」

明奈と翼は慌てて取り繕う。

「えっ、お笑い番組は昨日は入らないでしょ？」

翔の表情は不審そうだ。明奈が慌てて口を開く。

「ああっ、違う！昨日じゃなくて、一昨日だよ、一昨日。」

明奈の言葉に何度もうなずく翼。

「ああ、ピンクカーペットね。」

翔は納得したようだ…。

* * *

その日の帰り道…

「明日は弟の誕生日なんだ。」

翔が口を開く。

「そうなんだ。おめでとう。プレゼントは買った？」

明奈が尋ねる。

「うん、前からほしがってたカードゲームセットにしたよ。」

「そっか。喜んでくれるといいね。」

「うん。…また、いつものごちそうが食べれるぞ〜」

「良かったね。お母さんが作ってくれるの？」

「うん、ケーキも手作りなんだ。それといつも、カニとアイスの盛り合わせが出るんだよ。」

翔がそう言つと、明奈の表情が固まった。

「えっ!？」

「僕は普通にチョコレートケーキが好きで…、お兄ちゃんもカニが好きで…、弟はアイスが大好きだから、誕生日にはそれが出るのが恒例になったんだ。…変かな？」

翔の話を聞いた明奈は、気になる質問をすることにした。

「ううん、全然そんなことないよ。それで…カニって…、カニみそもたべたりする…??？」

「うん、僕は食べるよ。弟はちょっと苦手みたいだけどね。」

「そっか…。」

明奈は何かを理解したような気がした…。

「……………」

不意に翔が小さな声で言う。

「明奈…手つないでもいい?」

「…うん。」

お互いの手の温かさを感じながら、どこか恥ずかしそうに歩く二人…。

…明奈はやっぱり翔が大好きなのだった。

くだらない話ですみませんでしたm(_____)m ちなみに、「スイサイ」と電子辞書で調べたら、ミズナと同じ漢字で載っていて「食用の水草」とありました。でも、野菜の水菜とは、やっぱり違うみたいですよ…。

明奈、翔、沙枝、翼の4人は学食にいた。

とりとめもない話をしている4人。ふと、翼が口を開いた。

「俺、そろそろ車の免許取りたいんだけどさ。翔は、どこの教習所で取った？」

「ああ、家から一番近い中央教習所だよ。」

翔の返事に、明奈は驚いた。

「ええーっ!? 翔、免許持ってたの!？」

それを聞いて、翼も驚いた。

「明奈ちゃん、知らなかったの…?」

「う、うん。…って、翔! どうして教えてくれなかったの!？」

「えっ、か、隠してたつもりはないよ。話す機会がなかっただけ…。」

「そうなんだ。免許って翔くんでも取れるんだね」

沙枝はそう言って、感心したようにうなずいた。

(おいおい…)

翼は、沙枝の言葉に少し焦る。

「それで、いつ取ったの？」

明奈が質問する。

「えっと、受験終わってすぐだよ。」

「へえ、そんな早く…。」

その時、翼が何かをひらめいたようだ。

「そうだ。翔、明奈ちゃんとドライブに行けばいいじゃん！」

「そうだよ。良いアイデアだね。」

沙枝も同調する。

だが、翔は不安そうな表情になる。

「でも、家族以外の人乗せて運転したことないし…。そんなに運転上手い方じゃないから…。たぶんないと思うけど…。明奈を新聞の朝刊に載せるようなことはしたくないよ…！」

それを聞いた明奈は、明るい声で翔にこう言った。

「大丈夫だよ！私、そんなに簡単に死なないから！私、翔と一緒にドライブ行きたい！ね、連れてってよ！」

明奈の笑顔があまりにもキラキラしているので、翔もその気になった。

「わかったよ！大丈夫、絶対に事故ったりしないから！」

…かくして、2人はドライブに行くことになった。

* * *

土曜日：明奈の携帯にメールが入る。

<< 家の前に着いたよ 準備できてる？

メールを見た明奈は嬉しそうに返信した。

<< うん（＾・＾） 今行くね

明奈が外に出ると、親から借りたであろう青い車と翔の姿があった。

「明奈、お待たせ」

翔が手を振ると、明奈が笑顔になる。

「さあ、乗って乗って。」

翔が助手席のドアを開けてくれた。

「ありがとう。」

明奈が車に乗り込むと、すぐに翔も隣に乗り込む。

「さあ、行くつか。」

そう言って、車を発進する翔。

「どこか行きたいところある？」

「…うーん、そうだなあ…。」

明奈は、じっと考える。が…

「何も思い浮かばないや。ちゃんと計画しておけばよかったね。」

「そっか…どうしようね…。」

翔は少し考えて、口を開く。

「そうだ！ 昔、よく親に連れてってもらった場所ですごくきれいなところがあるんだ。1時間半くらいかかるんだけど良い？」

「うん、むしろドライブなんだから遠くに行きたいよ！それに、大学入るのにこっちに引っ越してきたはいいけど、大学周辺以外のこ
と全然知らないし。」

明奈は笑顔でそう答えた。

* * *

街を出て、川沿いの道を静かに走る車…。

翔は安全運転なので、明奈はとでもリラックスすることができた。

話が途切れて静かになった時、明奈は助手席からそっと翔の横顔を見つめてみた。

運転している翔の顔つきは真剣でとても格好良い。

あまり見ない表情にドキドキした。

でも、やはりきれいな瞳と優しい雰囲気は変わらない。

その時、翔の表情が穏やかになった。

「明奈、見て。馬がいっぱいいるよ。ほらっ、子馬が走り回ってる。カワイイね〜。」

車は牧場地帯に入っていたらしい。

「ホントだ〜。カワイイ〜。」

明奈は窓の外を見つめて笑顔になった。

「翔、あのね…」

2人はまたおしゃべりを始めた。

車は再び街に入り、坂道を登る。

そして、小高い丘の上で止まった。

「さあ、着いたよ!」

「やったー!」

明奈と翔は車を降りる。

そこには緑の草原が広がっていた。ほとんどがクローバーで、ところどころに白くて小さな花が咲いている。その奥には海が臨め、500メートルほど進むと崖になっているようだ。

「わぁー、すごい!翔、本当にきれいだね!ありがとう!」

明奈は幸せそうだ。翔も自然と笑顔になる。

「それは良かった。ねえ、ちょっと奥まで行ってみようか。」

「うん、よし!競争だよ。」

そう言って、明奈は先に走り出してしまった。

「ちょっと、待ってよ。」

すぐに翔も後を追う。

元気よく走り出した明奈だが、すぐに疲れてその場に寝転んでしまった。

「ほら、明奈…急ぐからだよ。」

そう言っつて、すぐに追いついた翔も明奈の横に寝転んだ。

仰向けになって空を見つめる二人。

「翔、疲れないんだね。」

「うん。一応、陸上部だったからね。」

「今日は晴れて良かったね。ずっとこうしてたいかも…」

「うん。暖かくて気持ちいいね。」

その時…明奈がすつと飛び起きた。

「翔、見て！四つ葉のクローバーだよ！！」

翔が明奈の指さす方を見ると、そこには確かに四つ葉のクローバーがあった。

「明奈、やったね！」

2人は微笑みあった。

しばらく休んだ後、崖の近くまで歩いてきた2人。

「すごい。今度は一面海だ〜。」

そう言っつて、崖の端まで行こうとする明奈。

「明奈、そんなに行ったら危ないよ。」

「大丈夫、大丈夫。」

「しょうがないな〜」

翔も前方にいる明奈のもとに行っつて肩を並べる。

「本当に真っ青な海だね〜」

翔がつぶやくように言っつと、明奈が小さくうなずく。

「うん…キレイ…」

2人は真っ青な海に見とれていた。

「明奈：キスしても良い？」

沈黙を破りそつとたずねる翔。

顔を赤らめながら小さくうなずくと、優しく温かな感触が明奈を包み込み、2人の唇がそつと触れ合った。

* * *

丘のそばの街に戻り、喫茶店に入ったり、レストランで夕食を食べたりしていると、すっかり辺りが暗くなっていた。

「さあ、明奈、帰ろうか。」

「うん。」

車に乗り込んだ2人は、明奈の家を目指した。

「翔は安全運転…だから…安心……」

少し進んだところでそう言って眠ってしまう明奈。

翔はそんな明奈の寝顔を時々微笑ましく見つめながら運転した。

次に明奈が目を覚ました時には、家まであと3分といったところだった。

寝ぼけ眼の明奈を見て、翔が笑った。

「おはよう（笑）もうすぐ着くよ。」

翔の言葉通り、適当におしゃべりしているとあっという間に到着してしまった。

明奈は車から降り、運転席の翔にお礼を言う。

「今日はありがとう。すごく楽しかったよ。」

「うん。僕も楽しかった。…また行こうね。」

明奈は、うなずいて翔に手を振った。

「バイバイ。気をつけて帰ってね。」

「うん、またね。」

翔がそう言うと、明奈は名残惜しそうに助手席のドアを閉め、走り去っていく翔の車を見送った。

（絶対にまた行こうね…約束だよ）

vol.12 diary ちょっと遠くへ(後書き)

相変わらず文才がなさ過ぎて、ごめんなさい。

内容の面でも文章能力の面でも、書いてて恥ずかしいです。そして、自分が過去に書いた作品を読むのはもっと恥ずかしいです。読み直しても恥ずかしくない作品を書きたいものです！

とある日曜日…

翔と一緒にDVDを見るために明奈の家に来ていた。

とりとめもない話をしていると、翔が思い出したようにカバンの中を探る。

「そつだ！明奈、お土産があるんだよ。」

「えっ、本当？どこ行ってきたの？」

「青森だよ。いとこがいるんだよね。だから、この前家族と一緒に行ってきたんだ。」

翔が明奈に小さな袋を渡す。

「はい、これ。」

「ありがとう。開けても良い？」

明奈は笑顔で尋ねる。

「もちろん」

翔の返事を聞き、明奈が中身を取り出すと、翔が笑顔でこう言った。

「ねっ、かわいいサクランボでしょ？」

「えっ…?」

明奈は戸惑った。中身はぬいぐるみのキーホルダーだった。しかし、それはサクラランボではなく赤リンゴと青リンゴのセットだった。それぞれにピンク色の頬をした可愛らしい顔がデザインしてある。

「ありがとう、翔。すごく嬉しい！でも、これはサクラランボじゃなくて、リンゴの兄弟だよ。ほら、青森のお土産なんだし。上だけ繋がってるからサクラランボに見えなくもないけどね。」

「あっ、そうだったのか！どうしてサクラランボなのに赤と緑なんだろうって不思議だったんだ。」

「翔らしいね。アハハ…」

明奈は笑い出す。恥ずかしそうにしている翔だったが、あることに気づいた。

「ねえ、このキーホルダー1つずつ取り外せるよ。あっ、もしかしてこれって、カップルが1つずつ持つものなんじゃないかな。」

翔が赤リンゴと青リンゴをそれぞれ取り外しながら言う。

ようやくこのキーホルダーの意味がわかった翔と明奈はなんだか照れくさくなった。

「そっかー、兄弟じゃなかったんだ。…じゃあ、赤リンゴが私で、青リンゴが翔だね。」

明奈がそう言うと、翔が赤リングを手渡す。

「ありがとう、翔。…何か2人で同じもの持つの恥ずかしいな。」

「…そうだね。でも、いいんじゃない。」

「うん、これ、カワイイしね。」

そう言って明奈は、置いてあった青リングの前に赤リングを置く。

…すると、お互いに正面を向いた赤リングと青リングは引き寄せあって、くっついた。

どうやら一部分に磁石が入っていたらしい。

それは、明らかにキスにしか見えなかった…。

「「あっ！……！」」

2人は同時に驚いて固まった。そして、顔が真っ赤になる。

「……………」

「ちゅ、ちゅー…しちゃった……。」

明奈が消え入りそうな声で言う。

「ねえねえねえ、明奈。DVD見よう！DVD！」

慌ててDVDを見る準備を始める翔。

「そ、そうだよ！そのために翔来たんだもんね。私、お菓子持ってくるね！」

明奈も慌ててその場を離れる。

そして、ちょっと距離を置いて座って、DVDを見始める2人だった…。

vol.13-diary8 天然彼氏のお土産（後書き）

中学校の修学旅行で青森に行った時、弟のために買ったのがこんなキーホルダーでした。さすがに、サクランボと間違えはしませんでしたが、キスすることは、弟にプレゼントしてからわかってビックリしたのを覚えています。

とある日曜日…

明奈と翔は自然公園に散歩しにきた。

「わゝ、久しぶりだなゝ」

翔が小学生の頃まで良く来ていた場所らしく「久しぶりに行ってみたい」と言つて、明奈を案内したのだ。

「へえゝ、翔、いつつもここで遊んでたの？」

「うゝん、時々かな。ほら、ちょっと遠かったでしょ？」

確かに翔の家からこの自然公園までは歩いて30分ちよつとかかった。しかし、公園の周りはイチョウの木で囲まれており、中央には噴水がある。そして、色とりどりの花の植え込みや新緑の芝生がとても美しい。30分以上歩いて来る価値はある。

「秋になるとね、木がイチョウでいっぱいになって、地面もイチョウのじゅうつたんになって、もつときれいな景色になるんだ。」

「そうなんだ。じゃあ、秋にも絶対来ようね！」

「もちろん。」

そんなことを話しながら公園内を歩いていると、明奈が突然子ども用の遊具に飛び乗った。

「これ、懐かしい〜。翔もこういいうので遊ばなかった？」

「うん、遊んだよ。僕も乗ってみよう。」

2人の乗ったヒヨコの乗り物は、下部のスプリングで揺れる仕組みになっている。子ども用の遊具に大人が揺らしているわけなので揺れは大きくなる。それは2人を楽しませるのに十分だった…。

「翔、これ結構面白いね〜。」

「なんか童心に帰るね〜。」

その時、母親と手をつないだ7歳ぐらいの男の子が通りかかる。そして、翔と明奈を見てこう言っただけ。

「…ねえ、お母さん、あの人たち、バカだね。」

男の子の母親は「そんなこと言っちゃダメでしょ。」と小声で言って、足早に息子と共に去って行った。

男の子の声は、翔と明奈の耳にも入り、慌てて遊具から飛び降りた。そして、小声でボソボソと話し出す。

「明奈、僕たち本当にバカだったね…。」

「でも、あんなにはつきり言わなかった…。(；´д´)」「

「子どもは正直だからね…。」

* * *

公園のベンチでゆっくり休んだ翔と明奈は、翔の家の方面へ戻るところにした。

ところが、歩けば歩くほど、元来た道とは全く違う風景になる。

「あれ、翔、何か変じゃない？」

「ごめん…来たの10年ぶりくらいだったから、迷っちゃったかも…、いや、迷いました…。ごめんね…。」

「アハハ、やっぱり、迷っちゃったんだ。でも、いいよ。近道探して帰ろう。時間あるんだし、ゆっくり帰ろうよ。」

どうやら、もう20分くらい違う方向へと歩いていたらしい。翔と明奈は近くの個人店で地域マップを手に入れ、すぐに近道を見つけたことが出来た。その道に沿ってゆっくり歩く。

「なんか、こういうのも良いね。」

「うん。知らない道を一緒に歩いてみるのも楽しいよね。…迷った僕が言うのも難だけど。」

「ううん、私だって気付かなかったわけだし…。」

その時、目の前に小さなログハウスが見えてきた。

「ねえ、明奈あれ見て。何かオシャレだね。」

「うん。あつ、見て。ここ喫茶店みたいだよ。」

明奈がログハウスの入り口にある看板を指して言う。

「せっかくだから寄って行こうか。」

「そうだね！」

翔と明奈は喫茶店の中に入る。

「いらっしやい。」

お店の中に入ると、優しそうな老夫婦が出迎えてくれた。店内の小さなイスやテーブルも木できており、壁やカウンターには、蔦で作ったリースのようなものや木彫りのかわいらしい動物が飾っている。

翔と明奈は席に着くとそれぞれケーキセットを頼んだ。

「オシャレなお店だね。」

「そうだね。」

翔がうなずくと、お婆さんがやってきて、お皿いっぱいのお菓子をテーブルに置いた。

「かわいいカップルさん、サービスだよ。」

「「ありがとうございます！」」

お婆さんの笑顔を見て、翔と明奈も自然と笑顔になる。「かわいいカップル」なんて言われてのは恥ずかしかったけれど…。

お婆さんはカウンター内に戻ると、オーブンから焼きたてのガトーショコラを取り出した。お爺さんがそれを受取ってナイフで切り分ける。夫婦2人で寄り添って仲睦まじい様子であった。

翔と明奈はその様子を見ていた。

「明奈、あの夫婦仲良しなんだね。」

「うん、あっちこそかわいいカップルだよね。」

その時、今度はお爺さんがケーキセットを持ってきてくれた。

「お待たせ。ゆっくりしてお行き。」

「「ありがとうございます。いただきます！」」

クッキーもガトーショコラも、とってもおいしかった。

日が傾きだした頃、翔と明奈は喫茶店を後にした。

「「ありがとう。」」

「また近くを通ったら来ておくれ。」

老夫婦が温かく見送る中、2人はゆっくり歩き出した。

夕暮れの道を手をつないで歩く二人。

「ねえ、明奈、あのお店に行けて良かったね。」

「うん、あの老夫婦、本当に仲良しなんだね。」

「クッキーもケーキもおいしかったし、いろんな意味で温かかったし。」

「なんか道に迷って本当に良かった。」

明奈がそう言って笑うと、翔がそっと口を開く。

「ねえ…、僕たちもあんな風に…」

しかし、そこで口を閉ざした。…こういうことは軽々しく口にしてはいけない…

「あんな風に…何？」

明奈が続きを求める。

「…えっと、僕たちもあんな風に今度一緒にお菓子作らない？」

「良いね　じゃあ、次会うときはウチでお菓子作るつよ。」

心もつないだ手も温かい翔と明奈だった…。

…僕たちもあんな風に、お爺ちゃん、お婆ちゃんになっても、
と仲良く暮らそうね…

vol.15-diary10 キミの弟(前書き)

明奈が初めて翔の家に来たときのエピソードです。

「ごめんね。わざわざ、弟のために。」

「ううん、いいよ。翔の家族に会ってみたいし。」

今日は明奈が翔の家に遊びに来たのだった。

5日前のこと…

翔と小学3年生の弟、優也は茶の間でポケモンカードゲームをしていた。

「あーあ、また負けちゃった。」

「もうう、翔お兄ちゃん弱すぎ！ つまんない。」

今まで数え切れないほどカードゲームをしている2人だが、今まで翔が勝ったことは数えるほどしかない。本日5連勝した優也は飽き飽きした顔をしている。

「ごめんごめん…今度はもっと強くなるから。」

「いつつもそればかり。もう翔お兄ちゃんと対戦するの飽きた。」

そう言った優也だったが当然何かをひらめいたようだ。

「そうだ！翔お兄ちゃんのカノジョってポケモン好きなんですよ。ポケモンカードゲームも出来る？」

「うん、確か少し持ってたよ。」

「じゃあ、今度お家に連れて来てよ。僕、翔お兄ちゃんのカノジョ見てみたい。それで、カードゲームもしたい。」

「えーっ、そんな…気を使わせちゃうよ。」

翔はあまり乗り気じゃないようだ。

その時、台所で晩ご飯を準備していた母親が口を開いた。

「私も明奈ちゃんに会ってみたいな。翔と付き合いたいなんて言う優しくてボランテニア精神の強い子がどんな子か見てみたいもん。大丈夫。明奈ちゃんには、あんまり気を使わせないようにするから。」

「母さん…。…うん、じゃあ聞くだけ聞いてみるよ。明奈が嫌そうな顔したらすぐ諦めるからね。」

…明奈は翔の頼みを快諾してくれたのだった。

明奈を迎えに行き、自宅まで案内する翔。無事にたどり着くと玄関の扉を開けた。

「さあ、入って。」

「おじゃまします。」

明奈は玄関に足を踏み入れる。すると、すぐに優也が飛び出してきた。

「こんにちは！」

「こんにちは、優也君。」

「こつちだよ。」

翔と優也は明奈をリビングに案内する。

「こんにちは…」

挨拶する明奈だったがリビングには誰もいなかった。翔から父親と母親もいると聞いていたのだが…。

これには翔も驚いたようだった。

「あれ？ 優也、お母さんとお父さんは？」

「…僕知らないよ。さっきまで部屋で宿題してたもん。」

「そっか…。きっと散歩にでも行ったのかも。うちの親、よく2人で散歩とか買い物とか行くんだよね。」

…“あまり気を使わせないようにする”って言ってたし…と、翔は思った。

「さあ、適当に座って。今お菓子持ってくるから。」

「ありがとう。私も持ってきたから先に開けておくね。」

そうして、明奈と翔と優也は、お菓子を食べながらおしゃべりを始めた。

そんな3人の姿を隣の部屋のドアを少しだけ開けてこっそりのぞいている人物がいた。

翔の両親だ。

「ねえ、お父さん…何かすごく悪いことをしてる気分なんだけど…」

「ここはロケット団になったと思って…。これが明奈ちゃんに気を使わせない究極の方法だと思うんだ。」

「そうかしら…それにしても明奈ちゃんってとってもかわいい子ね。」

「ああ、翔にはもつたいたい気がするよ。あんなかわいい子を恋人にするなんて、翔なかなかやるな」

約束通り、明奈は優也とポケモンカードゲームを始める。

明奈はカードを持つてはいたものの対戦ルールは知らなかった。しかし、翔と優也が教えるとすぐに理解し、最初から優也と互角に戦っている。

「明奈お姉ちゃん、すごい。翔お兄ちゃん、今でもたまたまにルール間違えるんだよ。」

そう言う優也に明奈はクスクス笑う。

「ちょっと優也。あんまりお兄ちゃんの悪口言わないですよ。」
たしなめる翔だったが、

「悪口じゃないもん。」

すぐに優也に反論されてしまった。

そうして、3人は楽しく笑い合って過ごした。

カードゲームは明奈も優也も同数勝って終わった。

「明奈ちゃんありがとう。楽しかったよ。」

「どういたしまして。優也君、私のカード少しあげるね。」

そう言って、明奈がカードを手渡す。

「ありがとう！ 本当にカードもらっていいの!？」

「うん、いいよ…」

その時、隣の部屋では翔の母親が慌てて立ちあがっていた。

「優也つたら、明奈ちゃんからカードをもらったみたい。私からもお礼言わなきゃ。」

「でも、隠れてた意味が…」

そう言って父親が、ドアを開けかけた母親を止めようとしたが、反対に勢い余ってドアを思いっきり開いてしまった。

翔と優也、そして明奈の視線が同時に降りかかる。

「あっ、パパとママだっ!」

「えっ、散歩に行つてたんじゃなかったの？」

「こっ…こんにちは…」

明奈は慌てて両親にあいさつした。

「「明奈ちゃん…ようこそ…。」」

両親も恥ずかしそうな声で明奈にあいさつした。

それから、翔と明奈は翔の部屋で、優也と両親はリビングで過ごすことになった。

「明奈…変なところを見せてごめんね。」

「いえいえ、私に気を使つていただいたみたいで…翔の家族って面白いね。」

「うん、結構仲良い方だと思うよ。」

優也は両親と過ごしながらも、翔の部屋のある2階をずっと気にしている。

そんな姿を見て、両親は顔を見合せて笑った。

「それでは、おじゃましました。」

明奈が帰る時間になった。

「明奈ちゃんまた遊びに来てね。」

「遠慮しないで来てほしいな。」

翔の母親と父親が温かく言った。

その時、翔の隣にいた優也が、笑顔で明奈の目の前に来た。

「どうしたの？優也君。」

「ねえ、僕、明奈ちゃんと結婚したい！ 優しいし、一緒に遊んでくれて楽しかったから。大きくなったら、僕と結婚してくれる？」

優也の言葉を聞いて、クスクス笑う両親。でも、翔は戸惑いの表情を見せていた。

「優也！ ダメ！ そんなの絶対ダメ！」

たかが弟が相手なのに…翔の様子は冷静とは言えない…。

「どうして？ だって、カノジョってというのは、結婚とは違うんでしょ？ だから僕が明奈ちゃんと結婚しても良いんだよね？」

「ダメなものダメなものはダメ！ …だって…その…いつかは…」

翔はチラッと明奈の様子をうかがう。

「うーん、どうしようかな。翔より優也君の方が賢そうだしな」

明奈は意地悪な表情をしてそう言った。

「明奈…」

翔が肩を落とすと、玄関に笑い声があふれた。

その夜、翔の母親は優也にこう言った。

「優也は明奈ちゃんと結婚するのは難しいかな。でも、明奈ちゃん
んは将来、優也のお姉ちゃんになるかもしれない…」

「ん？」

意味がわからないという顔をしている優也に母親は優しく微笑んだ。

vol.16・diary11 恋はファンタジー（前書き）

今回はいつもと違う雰囲気の仕事になっていると思います。

ポケモンの2次創作に近いです。本当に2次創作に当たるのかどうかはよくわからないのですが…。ただ、アニメのポケモンを見ていて思いついた作品ではありません。

その日、期末レポートを全て書き終えた明奈は、DSを開いた。

プレイするのは大好きなポケモンだ。

久しぶりにじっくりプレイできそうだと明奈はワクワクしていた。

電源を入れ、野生のポケモンをひたすら倒し、一番のパートナーであるピカチュウを育てる。

あと3体野生のポケモンを倒したらジムリーダーに挑戦しよう。

そう考えていると、すぐに野生のポケモンに遭遇した。…と同時に突然DSから強い光が差した。

「いやっ！」

光が強すぎて目を開けられない…。しかも意識が遠のいてゆく…。

* * *

明奈が目を覚ましたとき、そこは道路の上だった。道路と言っても、

アスファルトではなく土のままであるし、周りは木と草むらばかりだ。

ここはどこ？

立ち上がってみたが、どうも目線の高さがおかしい。明奈は視線を下に移す。

「あっ…！…！」

黄色い身体…短い足…生え際だけ茶色くなっているギザギザのしっぽ…。これって…もしかして…

どづいづこと！？

明奈は驚くしかなかった。

近くの水たまりに顔を映してみる。

それはピカチュウ以外の何物でもなかった。

そんな…どうなってるの！？

その時、明奈…いや、ピカチュウの後ろをコラッタの群れが通り過ぎる。まもなくポップの大群も上空を去って行った。

私は、もしかしてポケモンの世界に来てしまったの？ 家族は…

？ 友達は…？ 翔は…？

ピカチュウはどうしたらいいか分からずトボトボと歩き始めた。

その時、目の前に人間を見つけた。それは、一番の親友、沙枝であった。

沙枝だ！ 沙枝はポケモンにならなかったんだね…。でも、あれは…？

沙枝はひどく困った表情をしていた。なぜなら沙枝のことをイシツブテが追いかけてまわしているからだ。

ピカチュウはその光景に近づいてみる。よく見ると、イシツブテは必死に紗枝に何かを伝えようとしている。

「ワシャ、ワシャ！ ワシャ、ワシャ！」

「もう、何なのよー！！ このイシツブテ〜！」

そう言って、沙枝はピカチュウに気づくことなくイシツブテから逃げるようにその場を去ってしまった。

イシツブテも一度はピカチュウに気がついたものの特に気にする風でもなくその場から去ってしまった。

私はこれからどうすればいいの？ お腹もすいてきちやったし…

そう思っていると、後ろから突然人間に抱きかかえられた。

その人間の顔を見ると…なんと翔だった！！

ピカチュウは必死に自分のことを伝えようとする。

「ピカピカー!!! ピカピ! ピカチュウ!!! (私、明奈だよ! 翔! 気づいて!)」

「よしよし。お腹がすいてるんだね。」

そう言つて翔は優しくピカチュウをなでてあげた。

ポケモンの言葉しかしゃべれなくなってしまった今、翔に意志を伝えるのは難しそうであった。

翔はピカチュウを抱え、洞窟の中へと入っていった。

翔、私だつて気付いてくれない…。そりゃそうだよね…。でも、翔つてやっぱり優しいな…。

翔の胸の中は温かく、体を撫でる手は優しい。そして、いつものように柔らかなく微笑みかけてくれる。

洞窟の中ではたき火がされており、翔はその近くにピカチュウを下ろし自分も座った。

そして、リュックからリンゴを取り出しピカチュウに手渡す。

「さあ、これを食べて。足りなかったらもう一個あるからね。」

「ピカピ! (ありがとう!)」

お腹のすいていたピカチュウはすぐにそれにかじりついた。甘くておいしい。

「ピカピカ！（おいしいよ！）」

「おいしいんだね。それは良かった。君はどうしてあんなところにいたの？」

翔に事情を聞かれたが、どう説明して良いのか分からない。

「ピカ、ピカピ…、チュウ、チュウ…（良く分からないけど、気が付いたらここにいたの。どうしたらいいか分からないよ。）」

「…そっか。困ってるのは分かったけど…。僕もね、自分が何でここにいるのかよくわからないんだ。だからね、とりあえず安全そうな場所を見つけた。1人だと心細いから何かわかるまで僕と一緒にいてくれないかな？」

「ピカー！（もちろん！）」

明奈はホツとした。とりあえず正体は分かってもらえないが翔と一緒にいられる。

「ピカチュウ、この辺に何かあるかちょっと探検してみようか」

翔とピカチュウは洞窟の外へと出かけて行った。

その夜…

再び洞窟に戻ってきた翔とピカチュウ。

ピカチュウは洞窟の入り口から空にある満月を眺め、考え事をして
いた。

私も、翔も、沙枝もみんなポケモンの世界に来た。それにしても、
どうして私だけピカチュウに…あつ！

あのイシツブテはもしかして…翼君？

凶星だった。あのイシツブテは「沙枝ちゃん！俺だよ！翼だよ
！気づいて〜！！」とアピールしていたのだ。あまりにもまとわ
りつき過ぎたので嫌われてしまったが…。

ふと振りかえって、両手のひらを広げてたき火で暖をとっている翔
を見つめる。最初に翔に拾われて、抱きかかえられた時、とてもド
キドキした。温かくて優しく、そして翔の鼓動が聞こえた…。

このままピカチュウでいるのも悪くないかも… そうだ！翔は私
の正体をわかってないんだ。

だったら、思いっきり甘えちゃおう

ピカチュウは翔のもとへと近づいた。

「あつ、ピカチュウ。寒いからこっちにおいで。」

「ピカチュウ〜。」

ピカチュウは翔の隣にくっつく。

「夜はたき火だけじゃ寒いかな。」

翔はそう言って、ピカチュウを抱きかかえ、自分のジャケットと胸の間にピカチュウを収めた。ジャケットの上から手を添え、ピカチュウを固定する。

「この方が暖かいかな。」

「ピカピ〜（あったかい…）」

っていうか、すごくドキドキする…

ピカチュウは、翔の胸に右頬をすりよせて甘えるしぐさを見せた。

「あっ、よしよし…」

翔が微笑んで、ピカチュウの左頬を撫でる。

翔に可愛いがられているピカチュウ…いや、明奈は幸せ気分だった。

翔がふつと撫でている手を止めて、ピカチュウに自分の方を向かせじっと見つめた。

優しい瞳が自分のことをしっかりと見てくれる。

「ピッピカチュウ！（翔、大好き！）」

明奈は嬉しくなって、翔の唇にそっと口づけた。

翔の頬が赤く染まる。明奈の顔も赤く染まる。

「ありがとう。ピカチュウ。…ううん、君は明奈だね。」

そう言つて、翔が笑顔を浮かべた。反対に、明奈の思考は停止する。

えっ…!?!? どうして…!?!?

放心状態のピカチュウの左頬と鼻の間に、翔がちよん、と指を当てた。…そこにある小さなホクロが、ピカチュウが明奈であることを示していた。

その時、ピカチュウの目の前に強い光が差した。

* * *

明奈は目を覚ました。

周りの景色は自分の部屋、目の前には電池切れとなったDSがあった。

「…夢?」

連日のテストとレポートの対策で疲れがたまっており、気が付いたら寝てしまっていたらしい。

携帯を見ると、翔からの着信があった。

次の日…

「翔ごめんね、昨日の電話気がつかなかったよ。」

「ううん、お風呂にでも入ってた？」

「あのね…」

明奈は昨日の夢を思い出し気恥ずかしくなる。

「…いい、言えない。」

「えっ、言えないようなことしてたの？」

翔が不思議そうに尋ね、明奈は焦る。

「違う違う違う！寝てたの！めっちゃ普通に寝てた！」

「そっかー。テストとレポート大変だったもんね。でも、これから休みに入るからゆっくりできるよ。」

「…うん。」

あんな夢…もう見たくないような、また見たいような…複雑な気分
の明奈だった。

vol.16-diary11 恋はファンタジー（後書き）

お読みいただいた方、ありがとうございます。

これからは、この『ふわふわ日記』と並行して、明奈ちゃんと翔君が大学を卒業して、社会人になった後のお話を書き始めようかななんて思っています。あくまで予定ですが…。

その日、翔と明奈はスイーツバイキングに来ていた。

「おいしい どれもこれも全部おいしい」

明奈は嬉しそうにケーキを食べ続けている。

ショートケーキ、チョコレートケーキ、ロールケーキ、モンブラン、ゼリー…何十種類もあるスイーツをすべて食べ終える前に、翔はすでに満腹だった。

一方の明奈は全種類を制覇しそうな勢いである。

「明奈、まだいけそう？」

「全然大丈夫！」

「それはすごいね…」

翔は明奈の食べる量に内心驚いていた。

そして…明奈はついにスイーツを全種類食べきった。

「やったー！ 全種類食べたよ。チョコレートケーキとラズベリーケーキがめっちゃおいしかったな。もう一回取ってくるね。」

「好きなだけどうぞっ」

驚きを隠し、翔は笑顔で明奈を見送る。そして、まだまだ余裕という様子の明奈の後姿をじっと見つめた。

明奈は普通のご飯でも他の女子よりはよく食べるほうだ。それにしても、スイーツの食べっぷりは尋常じゃなかった。

すぐにお皿にいっぱいケーキを乗せて明奈が戻ってきた。

「私、食べすぎかな？」

…と、言いながらも明奈は食べるのをやめる気など全くない。

「正直ね…。でも、たまにはいいんじゃないかな…」

「だよね！」

そう言って嬉しそうにケーキを口に頬張る明奈。

最初は驚いていた翔だったが、明奈の嬉しそうな姿を見ているうちにだんだん心が癒され、自分まで嬉しくなった。

どれだけ食べようと関係ない。だって明奈が笑顔なんだから…。

自分も、成長期でたくさん食べていた時期があったが、親はほほえましく見つめてくれていたものだ。

…翔はそんなことを思っていた。

結局、明奈はその日、全種類のスイーツを食べた後に、お気に入り
のケーキ数種類を2回ずつ食べた。

「翔、今日は楽しかったよ　また行きたいな。」

「うん、それとバイキング以外にも安くてたくさん食べられるお店があったら探そうね。」

数日後…

明奈は、翔の家に遊びに来ていた。この日は翔の母がご馳走してくれるという。

母からの合図を受け、翔が明奈を食卓に案内すると、そこには膨大な量のおかずが並べられていた。

サラダに、エビフライにハンバーグ、オムレツなど…どれもおいしそうなものばかりだ。

「おいしそう！　やっぱり男の子の兄弟だからたくさん食べるんですね。」

明奈が翔の母にそう言った。翔の家は、父と母に、男の子の3人兄弟である。

「それもあるけど…今日は明奈ちゃんが来たから特別なのよ。」

翔の母がそう答えると、父も口を開く。

「翔が、台所の材料見て、明奈ちゃんにはこんな量じゃ全然足りない、もっと作ってあげなきゃかわいそうだ、って言ったんだよ。明奈ちゃんは翔の2倍食べるって聞いているよ。」

それを聞いた明奈は顔が熱くなった。

…そして、翔のことをふくれっ面で見つめる。

「翔のバカ！ 言って良いことと悪いことがあるでしょ！ …あゝ、恥ずかしいよー」

そう言うと、明奈は両手で顔を隠して俯いた。

「えっ…いっぱい食べるのって良いことじゃ…。けど…ごめん、本当にごめんね。」

翔は戸惑いながらもすぐに謝る。

それを見ていた翔の家族が爆笑し、家の中が和やかな雰囲気になった。

すぐに翔を許した明奈は、おいしい晩御飯をやっぱりお腹いっぱい

いただくのだった。

vol.17-diary12 いっぱい食べる君が好き(後書き)

これって、翔君も悪いけど、むしろ翔君のお父さんの方に問題があるんじゃない…と自分でツツコミたくなってしまいました…まあ、気にしない。

約1カ月ぶりの投稿でした。

今日はバレンタインデー。授業が終わった明奈と翔は学食でのんびりすることにした。

「これ、作ってきたんだけど…」

明奈は早速、翔に手作りチョコレートマフィンをプレゼントする。

「ありがとう、明奈。」

翔はそれを受け取ると、嬉しそうに包み紙を開けた。

「おいしいかどうか分からないけど…」

「大丈夫、大丈夫。」

そう言つて、翔はマフィンを口にします。

明奈はドキドキしながら、翔の反応をうかがう。

「やっぱり…おいしいよ!!」

「本当？良かった」

翔が笑顔で言ってくれたので、明奈は心の底から安心した。

「あのね、すごく心配だったんだ。失敗したらどうしよう、気に入ってもらえなかったらどうしようって…。でも、翔が喜んでくれて本当に良かった!」

明奈が笑顔でそう言つと、翔がそつと口を開いた。

「あのね、実は僕も作ってきたんだ。」

「えっ?」

「ほら、明奈はホワイトデーのクッキーとかキャンディーより、チョコレートの方が好きでしょ?」

「うん、そうだけど…。わざわざありがとう!翔。」

明奈は、翔が自分のために手作りチョコを作ってきてくれたことが本当に嬉しかった。

「はい、これ!」

「ありがとう。」

翔が渡してくれた袋を受け取り、そつと開けてみる。

そこには、様々なポケモンが形どられたチョコレートがたくさん入っていた。

「わー、かわいい！ありがとう！」

翔は、また自分の大好きなものを作ってくれた。そう思うと明奈は心が温かくなった。

ティッシュを広げて、ポケモンのチョコレートを全部並べてみる。

「本当にかわいい。食べるのもったいないなー。翔、本当にありがとう。」

「いや、ポケモンセンターに型が売ってたから、それに入れて固めただけだよ。」

「ううん、すごく嬉しい。」

…ただこの時、明奈は嬉しいと思うと同時に周りからの痛い視線が気になっていた。

確かに、いくら逆バレンタインが流行つてると言っても、ポケモンのチョコレートを作ってプレゼントする男子学生はめったにいないだろう…。

“えっ、ポケモン？” “あのカップルちょっと面白くない？” という声が聞こえてくる…。

「そんなに喜んでもらえると僕も嬉しいよ！じゃあ、ホワイトデーにはポケモンクッキー作るから楽しみにしてて。」

翔はどうやら周りの雰囲気気づいていないらしい。

「う、うん。…それはありがとう。…ねえねえ、ホワイトデーは絶対お家デートが良いな。」

「そっかー。じゃあ、そうしよっか。」

（良かった…。）と明奈は心の中で思った。けれど…

（本当の本当は、迷惑さえかけてなければ周りの視線なんてどうでもいいんだ。翔と私が楽しいのが一番！）

この日は明奈にとって嬉しい一日となった。

バレンタインネタは書く予定がなかったのですが、ふと思いついたので書いてしまいました。私は、もしも好きな人から手作りポケモンチョコレートをもたらしたら非常に嬉しいですが、普通の人は引いちやうものでしょうか、それとも意外と引かないものでしょうか。もし、後者でしたら、この作品の「周りの視線が…」という描写は余計ですね。

あと…どうでも良いかもしれませんが一文ごとに一行あける形式を止めてみました。間が空いてれば読みやすいというものでもないな…とふと思ったので。

その日、明奈と翔は街に出た。

「あれ、こんなところにメイド喫茶なんてあったっけ？」

明奈が真新しい建物を指さして言う。

「それにコスプレショップも…。あっ、アニメイトも電気屋さんもあるよ。」

翔はこの建物がビルになっていることに気付いた。

「これで、この街のオタクの人は助かるね！」

「うん、そうだね。」

明奈と翔はその場を普通に通り過ぎようとした。
しかし…

「お客さん、ちよつとコスプレ試してみない？」

客引きをしていたコスプレショップの店員に声をかけられた。

「僕、そういうのはちよつと…」

断る翔。明奈ももちろん断った。

「私も興味ないです。でも、翔：彼は寒い時にピカチュウとかガチヤピンの着ぐるみを着て寝る習性があるので素質あると思います。」

…自分だけは。

「ちよつと明奈。何で!？」

「ちよつとだけ試してみてよ。ねっ」

「うっ…」

翔は結局コスプレを試してみることになった。

店の中に入る2人。

「じゃあ、私は待つてるからね。」

明奈がそう言うと、翔は別の店員に導かれ、試着室へ向かった。

「…でも、あなたもなかなか素質ありそうですね。彼氏さんと一緒にやっっちゃいましょうよ。」

「あっ、ちよつと。」

明奈も客引きをした店員に別の試着室へ連れて行かれた…。

数分後…

コスプレを終えた明奈と翔が戻ってきた。

「2人ともアニメはポケモンしか興味がないということでしたので、コスプレというよりは学園祭などの舞台を意識してみました。」

「「はあ…」」

店員にそう言われても、どう反応して良いかわからない2人。

でも…

明奈は翔の格好に内心ドキドキしていた。

翔はデイズニー映画に出てくる王子様のような格好をしていた。かぼちゃパンツに白タイツ…普通の男子が着たら笑ってしまいそうだが、翔は色が白くて中性的な顔立ちをしており、髪の毛も茶色目に染めているのでひどく似合っている。

（翔、格好良い！ ヤバい…プロポーズされたいかも…。）

一方、翔も明奈の格好にドキドキしていた。

明奈は初音ミクの格好をさせられていた。エメラルド色のカツラに黒いフリルがたくさんついたスカートを身につけ、ご丁寧にネギまで持たされている。

（ネギはちょっとおかしいけど…こういう明奈も全然悪くない！

かわいい！）

「「うう…恥ずかしいよ。」」

そう言いながらも、その時だけは内心何かに目覚めた気がした2人であった。

私は自分の作り上げたカップルで遊んでしまいました。明奈ちゃん、翔君、ごめんね（笑）

実はひっそりと書いていた「リュウセイグン」ふわふわ日記 その後」が今日で完結です。前半は雰囲気もだいぶ違いますし、大した面白い話でもありませんが、興味があれば見てみてください。彼らが社会人になってからのお話です。

この日、明奈と翔は映画館にいた。

目的は劇場版ポケットモンスターである。

この日は2人とも大学の講義が午前中しか入っていないかった。

「平日はすいてるねー。」

「うん、良かった。休日に行ったら、ちびっ子たちばかりだから、ウチら浮いちゃって若干恥ずかしいもんね。」

「ハハハ、そうだね。じゃあ、ジューズ買って座って待つてようか。」

「うん。」

映画が始まるのを待つ2人。2人とも手には厚紙でできたピカチュウのかぶりものを持っている。

「翔、これ…もらったはいいけど使えないね。」

「確かに…」

「弟君にあげたら？」

「喜ぶかな？」

「うーん、どうだろう？」

やがて、映画が始まると、2人はスクリーンに見入った。

映画がクライマックスに入る。サトシたちとポケモンの熱い友情に明奈は感動して泣きそうだった。

…その時、隣から聞こえるすすり泣く声が聞こえてくる。翔はすでに大号泣していた。

そんな翔を横目で確認し、続けてスクリーンを見ていた明奈もやがて涙を流した。

映画のエンディングが終わり、明奈はハンカチで涙を拭く。

「良い話だったね、翔。」

そう言っつて、翔の方を向くと翔はまだ涙を流していた。

「うん…ううっ、ピカチュウ…」

そんな翔を見て明奈はクスツと笑った。

帰り道…翔が明奈の方を見ると、考え事をしている様子だった。

翔はなんとなく不安になった。あんなに泣いてしまったから…もしかしたら嫌われてしまったのだろうか…。

少し歩いて、明奈はやっぱり話しかけてこない。

翔が思い切っつて話しかけようとした時…。

「翔…ありがとう。」

明奈が先に口を開いた。だが、翔にはその言葉の意味がわからない。

「…?」

「翔と一緒にいられて本当に嬉しい。」

「えっ? どうしたの突然? でも…それは僕も一緒だよ。」

「本当? 良かった…。まあ、細かいことは気にしないで…。翔、

私、お腹すいちゃった!早くいつものファミレス行こう!」

そう言っつて、明奈は走り出した。

「あっ、待っつてよ。」

慌ててそのあとを追いかける翔。

夕日が幸せそうな2人を静かに照らしていた。

・・・前に、私があなたに辛かった過去を打ち明けた時、あなたは一緒に泣いてくれたよね。私の心にそっと寄り添ってくれてるみたいで嬉しかったよ。映画館であなたが泣いてたの思い出したら、そんなことまで思い出しちゃって、いつのまにかあなたに「ありがとう」って言うってた。嬉しい時、悲しい時、感動した時、素直に涙を流せるあなたの温かさは、いつも私の心を満たしてくれる・・・。

vol・20・diary15 涙の温度（後書き）

久しぶりの更新となってしまいました。しかもタイトルも構成も100%満足ではないですが、私の能力ではこれが限界かも（汗）

明奈ちゃんの携帯が鳴りました。早速出てみると…。

『内は翔君の弟のセリフです。』

翔：もしもし、明奈？ 今、時間大丈夫？

明奈：うん、大丈夫だよ。

翔：じゃあ、ちよつと話さない？

明奈：うん、いいよ。

翔：明日、会えるかな？

明奈：うん、空いてるよ。そうだ！私の今月の目標は歴代のポケモンの映画のDVDを全部見ることなんだけど、うちで一緒に見ない？ もう3つお店で借りちゃったんだ

翔：うん、いいよー。

明奈：やったー。

翔：じゃあ、明日、明奈の家に行くね。ねえ、プリン味のチョコレートと、チョコレート味のプリン、どっちが好き？

明奈：えっ?? うーん…。どっちも美味しそうで決められないなー。

翔：そっかー。じゃあ、両方とも2つずつ買って持っていくね。

明奈：本当？ やったー！ ありがとう。

翔：ねえ、明日つてずつとDVD見てるの？

明奈：うーん、それも疲れるよね…。

翔：外でも遊ぼうよ。

明奈：そうだね。じゃあ、何か食べに行きたいな。最近、食べたいものがいっぱいあるんだよねー。パスタとか、ピザとか、お肉とか、オムライスとか、あと…桃とか、ケーキとか、それから、アイスとか。まあ、全部は食べにいけないだろうけど…。

翔：なるほど。あつ！ だったら、アイスを食べに行けばいいんだよ。ほら、サーティワンだったらだいたいの味あるから、きつと今言った味全部あるよ。

明奈：うーん、そうかなー。まあ、いいや。サーティワン、賛成！

翔：決まりだね。そうだ、何時にそっち行けばいいかな？ あんまり朝早すぎたら…
（翔の小学生の弟の声）『…翔お兄ちゃん、カノジヨと電話してるの！？ 何話してるの！？ ラブラブな話！？』（ ） 　こら、邪魔しちゃダメ！！ 今、大事な話してるんだよ！！
『でも、アイスとか言ってたじゃん。』 　いいの！ 後で遊んであげるから、ちょっと待ってて。・・・ごめんね、明奈。

明奈：アハハ。翔、頼りにされてるね。じゃあ、10時くらいにうちに来てくれる？

翔：うん、大丈夫だよ。

明奈：OK。じゃあ、シャワー浴びたいからそろそろ切るね。弟くと遊んであげて（笑）

翔：うん、また明日。楽しみにしてるね。

明奈：うん、私も。バイバイ。

翔：バイバイ。 　『ラブラブ、ラブラブ、ラブラブ…』
『……………』

明奈：（笑）……………。

vol.21-diary16 バカッブルの電話(*、*、*)(後書き)

何とか、2ヶ月更新なしフラグが立つ前に更新しました(笑) ク
オリティについてはご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4438m/>

ふわふわ日記

2011年6月27日01時02分発行